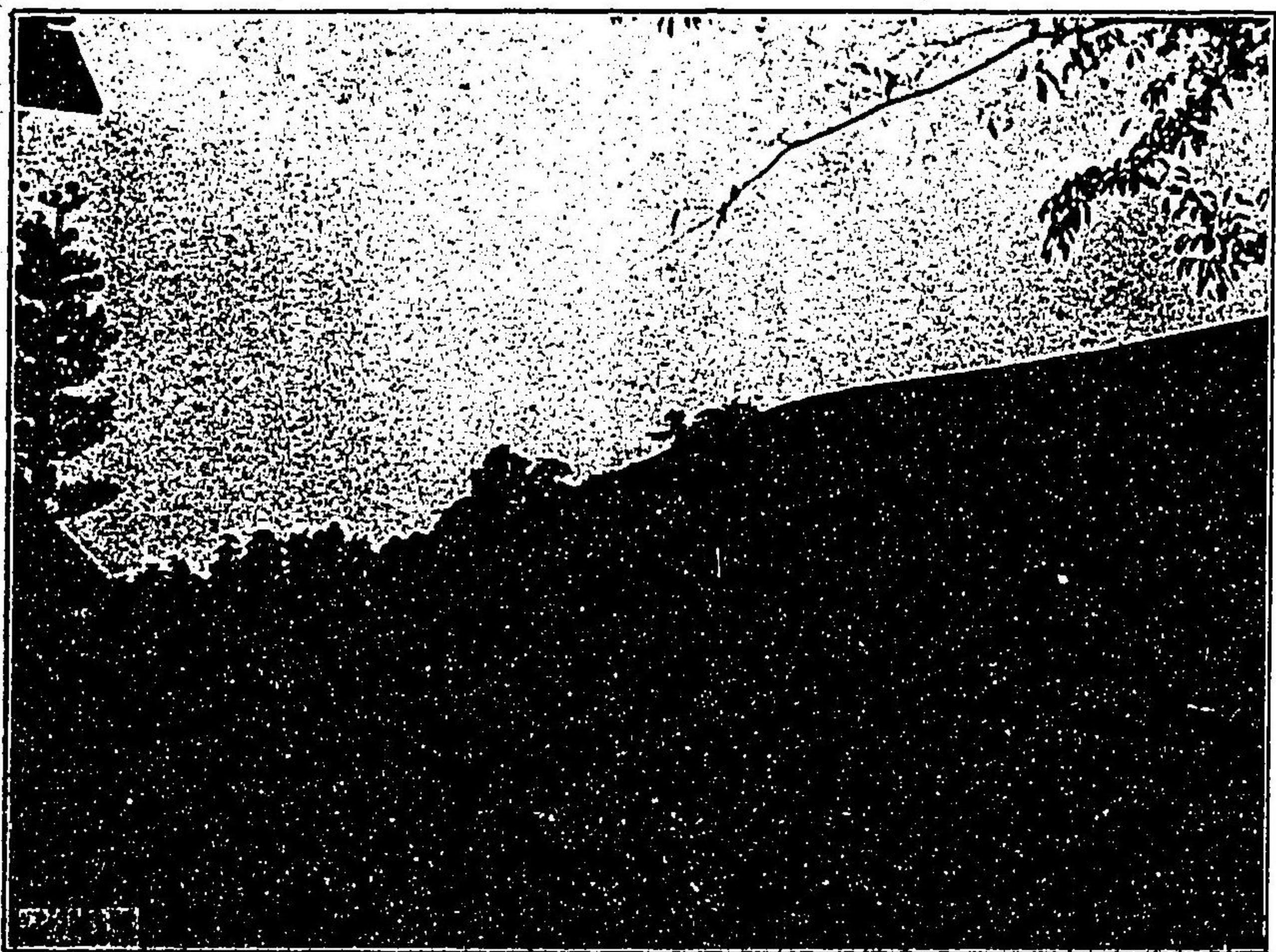


社 日 春 (良 奈)



山 笠 三

春日神社 奈良に於て観るべきの舊跡は大佛殿と春日の祠なり、春日山麓春日野に鎮坐す、官幣大社、祭神は武甕槌神、經津主神、天兒屋根命、姫太神の四社、神護景雲二年の創建にして、境内の廣袤實に八十五町四畝歩あり、古松老杉千年の樹、宏大なる社殿、壯麗なる迴廊(迴廊長百五間、中に左甚五郎作のねぢり廊といふあり)、之を彩るに丹塗を以てし、華美壯嚴、神威赫々として在すが如し、燈籠最も多くして一の鳥居より社殿に到る賽路の兩側に立併へたる石造の物のみにて凡二千餘基に及び、迴廊の軒に吊せる金屬製の釣燈籠亦一千餘個あり、群鹿徘徊して宛然俗界を隔つの感あり、

春日若宮 春日本社の南に在り、天押根命を祀る、長承四年の建立なり、

春日山 春日神社の後の山にして樹木鬱茂して歴史的面影を存す、御笠山ともいふ、

三笠山 本名は若草山なり、春日山に連なれども、此山には樹木無し、滿山悉く短草にして運動場の好適地、春日山の樹木鬱鬱たるに相映じて最も趣あり、春日は厥を生ず、毎年春季三笠山の山焼と稱して夜火を放ちて芝草を焼くことあり、遠近より態々見物に出掛くるなり、

手向山 三笠山の麓を少しく北に下る所にして楓の名所なり、八幡宮あり、天平勝寶二年の創建、應神天神外四靈を祭る、社前に雲慶作の高麗狗あり、菅原道真の和歌によりてあまねく世に知らる。

二月堂 手向山八幡の東一丁以内に在り、天平勝寶四年、實忠和尚の草創にして、天索院と號す、本尊は長七寸の十一面觀音にして、攝津難波浦にて獲たるものなり、常に人の肌の如く溫暖なるを以て肉身の觀音と稱す、毎年三月一日より十四日まで行はる、修二會といへる法事は、草創以來千百餘年絶へず行ひ來れるものといふ、その他御松明、御水取等の古佛式存せり、堂の西に大なる杉あり、良辨杉といふ、良辨僧正幼時其郷里近江より大鷲に爬み運ばれ、此杉の上にて育てられしといひ傳ふ。

三月堂 二月堂石段の直ぐ下に在り、天平勝寶五年、良辨僧正の開基なり、光明皇后作の不動尊及地藏を安す、其他一千餘年前の作に成れる佛像多く藏む。

三昧堂 大佛殿より二丁余の西に在り、二月堂の石段の直下なり、二月堂、三月堂と併ぶを以て、俗に四月堂と稱す、本尊普賢菩薩なり、二月堂、三月堂、三昧堂いづれも東大寺の舊境内なりしといふ。

寶藏院址 大佛殿の南、今は奈良帝室博物館となれり、有名なる十字鎗の元祖寶藏院覺善坊は此寺に住せしものにして、古武士は暫時も記憶より去らしむべからざるの舊跡也。

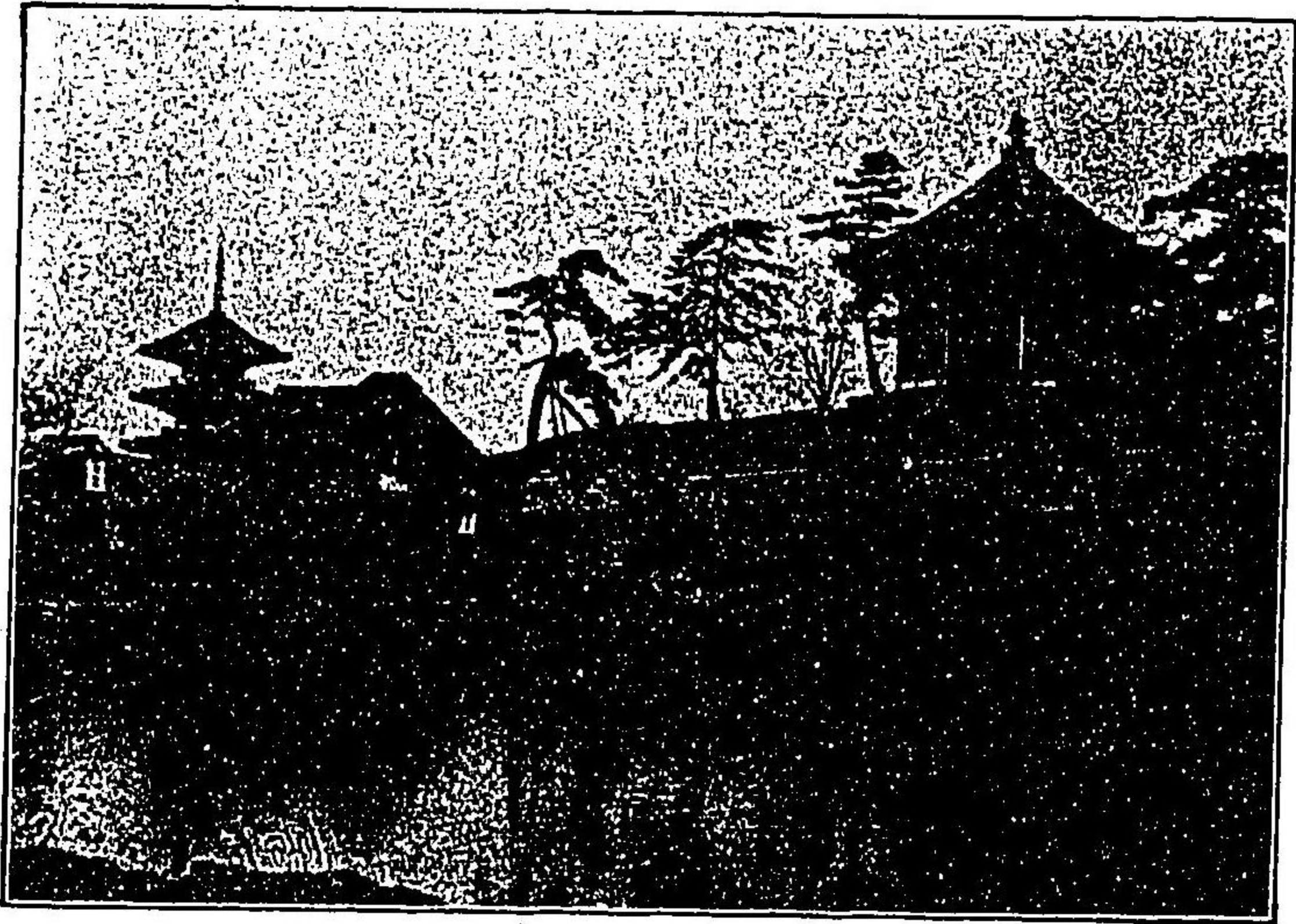
白藤の瀧 春日大鳥居より東八丁餘あり春日賽路の南側高樹森々たる中に在る春日神社御手洗川の流れなり、瀧大ならざるも風致に富み幽邃なり、夏期の納涼甚だ好し、

猿澤の池 奈良の中央に在り、天竺の彌猴池を摸したるものなりといふ、池中に鯉及び龜等多く棲息し、手を打てば出て來る、月の名所なり、

衣掛柳 猿澤池の東岸に在る古柳樹にして、むかし宮女采女恩寵の衰へたるを歎き、衣を脱して此柳に掛け猿澤池に身を投じたりとの口碑殘れり、

采女社 衣掛柳の傍に在り、采女の靈を祀れるもの、一小祠に過ぎざれども詩人の好題目、逸すべからず、

興福寺 猿澤の池の北に在り、南都七大寺の一にして、奈良市登大路に在り、和銅三年藤原不比等全國高市郡厩坂より此地に移せるなり、昔時は境内堂宇共に廣大にして比類なく、東大寺、西大寺、興福寺と並び稱せられしも屢々回祿の災に罹り、今



猿澤の池



興福寺

は南圓堂、北圓堂、金堂、文珠堂、五重塔、三重塔、大湯屋の數字を剩せるのみ、而して最も有名なるは南圓堂なり。

南圓堂　本尊は不空羼索觀音にして西國三十三ヶ所第九番の札所なり、弘仁四年藤原冬嗣の建立に係るものにして、八角の寶形造なり、その傍に五十二段の石階あり、其上に興福寺南大門の舊跡なり。

五重塔　興福寺境内の南端に在り、猿澤の池に望みて高く峙つ、十五丈六尺と聞こえたり、南圓堂と共に奈良の一壯觀として併稱せらる、その他三重塔等總て名高き建築なり、此邊夏期納涼の地。

花の松　興福寺文珠堂の前に在り、弘法大師の手植の松なりといふ、枝は低く地上に蔓り、東西十八間南北二十二間に及び蒼々として居然たる一小丘を爲す。

菩提院　興福寺大湯屋の南に在り、一を大御堂といひ又十三鐘の名あり、天平年中僧玄昉の草創せる寺にして無量壽佛を本尊とす、別に安置せる兒觀世音は一條天皇の御宇當院朝欣上人の侍童が死して其屍直ちに佛像に變化したるものとの傳あり。

十三鐘　南圓堂の内に在りて有名なる鐘なり、元は菩提院に在りて春日社勤行

の時刻を報じしもの曉の七ツと六ツ時とに撞き鳴らせしとぞ故に菩提院に十三鐘の別名あり、

(一四二)

春日の神鹿 春日神社境内に放ち飼へるものにて、此あたりを徘徊するなり、神護景雲二年春日大神が鹿島より御遷幸ありし際、白鹿を此地に伴ひその子孫の繁殖せるものと云、毎秋季に鹿の角伐りとして春日大通に廣やかなる柵を廻らし其中へ多数の牡鹿を逐ひ入れ、鐘鼓を打鳴らしつゝ鹿の逃ぐるを追掛け之を捕へて其角を伐るなり、

石子詰刑場の址 昔は春日の神鹿を殺したるものは石子詰とて土中に穴を掘り其中に犯罪者を入れ石を以て之を閉ぎて氣殺する慘刑あり、而して其刑場は今の菩提院の境内なりとなり、

春日の大鳥居 菩提院前の東に在り、春日神社の一の鳥居なり、是より北の道路は帝都時代の京極大路にして、東は春日境内に屬し、春日野と云ふ山野の帯映甚だ風雅なり、

佐保川 笠の名所にて、古歌頗る多し、

淺茅ヶ原 大鳥居の附近老松蔚然たる邊をいふ、一面池に臨みたるあたり十餘

の小亭あり、近來多くの梅樹を栽ゆ、花期の眺に宜し、

八重櫻 興福寺の北二丁、尋常師範學校門内に在り、所謂「奈良の都の八重櫻」なるものにして伊勢の大輔の歌に名高し、

其他奈良の名所舊蹟神社佛閣を擧ぐれば舊皇居地、開化天皇御陵、元明天皇御陵、元正天皇御陵、聖武天皇御陵、仁正皇后御陵、奈良阪大佛池、鹿道、眞言院、法蓮、木魅塚、新薬師寺、氷室神社、無量院、淨國院、西照寺、本妙寺、紅梅殿神社、井上神社、瑜珈神社、護國神社、水谷神社、興福院、明覺寺、悲田院、鶴橋公綱堂、金鉢寺、肘塚、崇道神社、不空院、鏡社、空海寺、逆光寺、事代主神社、不審の辻子等あり、

奈良の官衙 奈良縣廳、奈良地方裁判所、奈良區裁判所、奈良稅務署、添上郡役所等は皆登小路に在り、

奈良の學校病院 登大路に奈良縣師範學校、雜司に奈良縣高等女學校、錦町に奈良縣病院あり、

奈良公園 春日神社、東大寺、興福寺等の境内を合したる一大公園にして、之を奈良公園と稱す、規模の宏大なるは前の名所案内に照合して之を想すべき也、  
奈良帝室博物館 奈良公園内に在る洋風造りの建物にして大佛殿の西南五丁

(一四三)

餘に在り、明治二十七年の創立にして古代美術品及佛像等を集めて展覽に供す。  
奈良八景 猿澤池の月、南圓堂の藤、春日野の鹿、三笠山の月、東大寺の鐘、藤橋の行人、大佛殿の西南四丁雲井坂の雨、藤橋邊、佐保川の螢、之を奈良八景と稱す。  
奈良の遊廓 は元林院、本辻の二ヶ所に在り、

歴史上の人物 奈良朝、平城朝の名は、僅々七朝の間如何に人物の淵藪となりしよ、政治家には女傑、犬養三千代を始として、聖武天皇の帷幕參謀ともいふべき光明皇后陛下あり、藤原宇合、多治比の縣守、藤原麿、鈴鹿王、橘諸兄、吉備真備、藤原百川、藤原良嗣あり、而して醜名を歴史上に遺せし、惠美押勝亦た立派なる政治家にして、僧玄昉、僧道鏡の如き亦た平几漢にあらざるなり、學者には安部仲麿あり、忠臣には和氣清麿、和氣法均、尼真人、豐永等あり、軍人には阪上刈田麿、同田村麿等あり、宗教家には行基、僧正の如きあり、而して良辨、僧正、中將、姫等此時を以て生る、詩人には日本歌界の明星、柿本人麿、山部赤人の二俊才をはじめ、山上憶良、大伴家持等を出せり、美術家には運慶、湛慶相尋て出づ、殆んど其聖を極めたり、

奈良の詩歌 歴史に、文學に、美術に、宗教に、多くの關係を有する平城の山川が、詩歌の材料となるは勿論にして、一々擧ぐるに遑あらず、其一二を録す、特に漢詩に於

て、只だ竹外春畝二人の詩を擧ぐるものは、其間多少微意の存するあり、讀者希くば之を笑ふ勿れ、奈良が果して如何なる人物を出せし土地なるかを三思せよ、

南都

藤井 竹外

半空湧出兩浮圖、更有伽藍俯九衢、十二帝陵低不見、黑風白雨滿南都。

寧樂

伊藤 春畝

不見宸宮聳碧空、猶餘王氣與山雄、一千三百年前寺、春入伽藍煙樹中。

あをによし奈良のいへには萬代に吾もかよはんわするとおもふな

元明天皇御製

佐保すきて奈良の手向にあくぬさはいもを目かれず相見しめとぞ

長屋王

あをによし奈良のみやこは咲く花のにほふか如く今盛りなり  
藤原の花は盛りになりけり奈良のみやこを思ほすや君  
わが盛り又をちめやもほと／＼に奈良のみやこを見すかなり

小野老

四 細

なん

高くらの三笠の山に鳴く鳥のやめはつかるゝ戀もするかも

大伴卿 赤人

千鳥鳴く佐保の河瀬のさしれなみ止むときも無し吾戀ふらく

は 大伴娘

佐保川のさしれふみわたりぬは玉の駒し來る夜は年にもあら

ぬか 全 大嬢

春日山霞たなひきこゝろくゝ照れる月夜にひとりかもねん

○

奈良七重七堂伽藍八重櫻 芭蕉

菊の香や奈良には古き佛達 全

ひいと啼く尻聲悲し夜の鹿 全

水取やこもりの僧のくつの音 全

春風や人聲うつる三笠山 全

灌佛の日に生れあふ鹿の子かな 全

神くゝと春日茂りてつゝら山 鬼貫

寒聲や南大門の水の月 其角

今幾日秋の夜詰を春日山 全

あたし野や焼もろこしの骨ばかり 全

南大門たて込まれてや鹿の聲 正秀

秋の燈やゆかしき奈良の道具市 全

鹿の聲下駄のあまりの佛かな 蕪村

畿内五國就中最も舊蹟に富むものを山城、大和と爲す、況んや神武天皇奠都の國たる大和に於て古蹟の多きは勿論なり、奈良より外著者が特筆せんとするものは吉野なり。

○吉野

奈良より吉野に至らんとすれば、關西鐵道を王子驛前に出づより南和鐵道に乗り替へ、葛驛より下車すべし、六川まで二里餘の人車馬車の便を借りて直ちに之に到るを得ん、雷に花の吉野を見るのみならず、南朝五十餘年の夢の跡、及び遠きむかし天武のみかどに縁淺からぬ古跡なるを是れ、

吉野の名は神武天皇長髓彦御征伐の時すてに其名あり、應神天皇十九年吉野宮行

幸の事、天武天皇持統天皇常に行幸の事、文武天皇聖武天皇亦御臨幸ありし事、元正天皇養老七年五月吉野離宮に行幸し玉ふ事、其後は後醍醐、後村上、長慶、後龜山、南朝四天皇の皇居たりし事、國史の明かに吾人に教へつゝある所なり。

吉野山の櫻

天武天皇未だ大海人皇子と申せし時、吉野に籠居ましまして、夢に

櫻花山中に滿つるを見玉ひ、是れ木花開耶姫の示視なりとて、我志を得ば滿山櫻樹を植ゆんと誓はせ玉ひ、後に帝位にのぼりて櫻樹を植ゆ玉ひしを濫觴とすと、上一目千本、中一目千本、下一目千本の名あり、雲井櫻、關屋櫻、四本櫻、布引櫻、瀧櫻、

吉野川

源を大台原より發し、吉野、宇智の二郡を経て紀伊に入り、紀の川と爲る

六田の里

吉野川の兩岸に在り、六田の渡の名古書に見ゆたり。

一の阪

六田より吉野及び大峯山に登る路なり、此處より櫻樹を見る。

官幣吉野宮

後醍醐天皇を祭る、攝社に御影神社、祭神藤原資朝、藤原俊基、船岡神

社、祭神兒島範長、兒島高德、櫻山、茲俊、瀧櫻神社、祭神土居酒増、得能通綱あり、後醍醐天

皇御筆及び南朝歴代忠臣の遺物寶物あり。

村上彦四郎碑

藥師堂趾に在り、墓は碑石の上の高處に在り、護良親王吉野に籠

らせ玉ひし時、親王に代て死せしは人の知る所なり。



吉野の櫻



竹林院



吉野町 家數四百戸はかり崖腹に建て連ねて三階造りなり、四時遊客多きが爲めに出來たる都會なり、入口に黒門といへる總門あり、

銅華表 吉野町の總門に入る一丁許りの處に、高二丈五尺、柱周一丈一尺餘の大鳥居なり、聖武天皇の時に大佛鑄造の餘財を以て造ると云ひ傳ふ、

藏王堂 金峰山寺の本堂にて、天平年間行基僧正、金剛藏王權現の像を自造し、佛殿を創立して安置すといふ、大塔宮の陣所たり、昔は樓門、大塔、講堂、金堂、觀音堂、七十二間の廻廊、其外四十一の坊舎ありし由なるが、元弘正平の兵燹に罹りて殘らず、燒失せたり、今の堂宇は康正年間の建立にして、天正十九年に大修繕を加へしものなり、此藏王と山上の藏王と、奥の院の藏王とを世に金峰三所の權現といふなり、源義經の時、其外元弘頃まで吉野の山法師とてありしは、此四十二坊の法師なり、千年の巨利寶物の多き一々擧ぐべからず、

實城寺 金峰山寺の本坊にして、藏王堂の西に在り、明治八年廢寺となれり、延元中、後醍醐天皇の南遷し玉ふや、先づ吉水院を以て行在所とせられ、後實城寺を行宮と定めらる、諸儀式もこゝにて行はれしといふ、もと金輪王寺といひ、また黒木御所と稱す、徳川家康、天海僧正をして日光山に金輪王寺を遷し、實城寺と改む、天海を以

て金峰山寺學頭中興の第一世とせり、維新前吉野山が日光山の支配地たりしは之が爲なり、

吉水神社 南朝の行宮、元は吉水院といひしを明治八年吉水神社と改められたり、源義經の寓せしも此處なりと、

村上義隆墓 村上義光の男義隆は父と共に大塔宮に代て死せしもの、太平記に於て人の知る所なりとす、

塔尾山如意輪寺 日蓮宗、日藏上人の開基なり、小楠公の矢の根の歌をとめし所なり、久しく荒廢にまかせたりしが、近年に至りて方丈本堂等に修繕を加へ、舊觀を存す、

後醍醐天皇塔尾陵 如意堂の上に在り、詩人の所謂延元陵なり、

小楠公墓塚碑 森田節齋の撰文にて、正行が如意輪堂に残せし髻を埋めし所といふ、

藤本鐵石招魂碑 髻塚碑の傍に在り、維新前の志士藤本鐵石の魂を鎮め、其忠名を後に傳へんとて建てられしものなり、

金峰神社 吉野山の地主神なり、御嶽の號あり、古くよりの社にして文徳天皇及

清和天皇后時代に加位の事あり、

蹴拔塔 金峰神社の側に在り、飛彈内匠の建築に係るといふ、文治年間源義經此塔の中にかくれしを山僧の兵追ひ來りしかば、之を逃れて宮瀧の方へ落行きしと義經蹴拔塔といふなり、

喜藏院 本山の先達なり、聖護院門跡毎年入峯の時の宿所也、熊澤蕃山の假寓せし所なり、

西行庵 西行法師三年間此山にこもりてこゝに庵を結ひしとす、此邊の櫻を西行櫻といふなり、

苔清水 西行庵の傍の小川に苔清水と彫りたる標石あり、西行の歌、芭蕉の句にて名高し、

水分神社 世に子守明神といふ、拜殿の三十六歌仙は道光親王の筆、狩野永徳の畫なり、

横川覺範首塚 佐藤忠信と戦ひて打たれし荒法師の首塚なりといふ、忠信が義經に代りて防ぎ矢しける花矢倉といふは此邊の谷なりと、

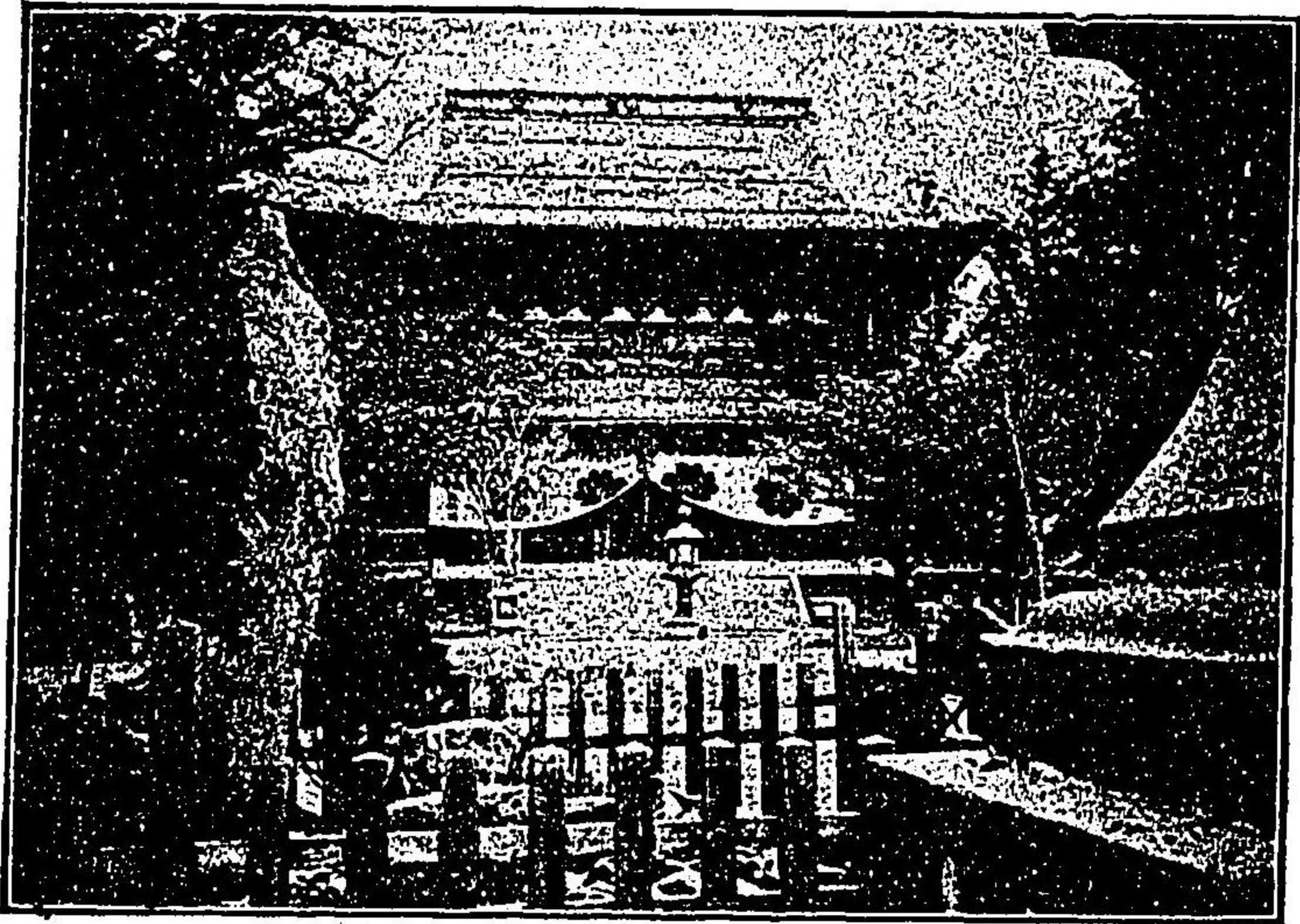
袖振山 古名那良志といふ、古歌多し、

山口神社 元勝手明神といへり、明治八年今の名に改稱せり、袖振山の麓に在り、忍穂耳命、大山祇命、木花咲耶姫等を祭る。

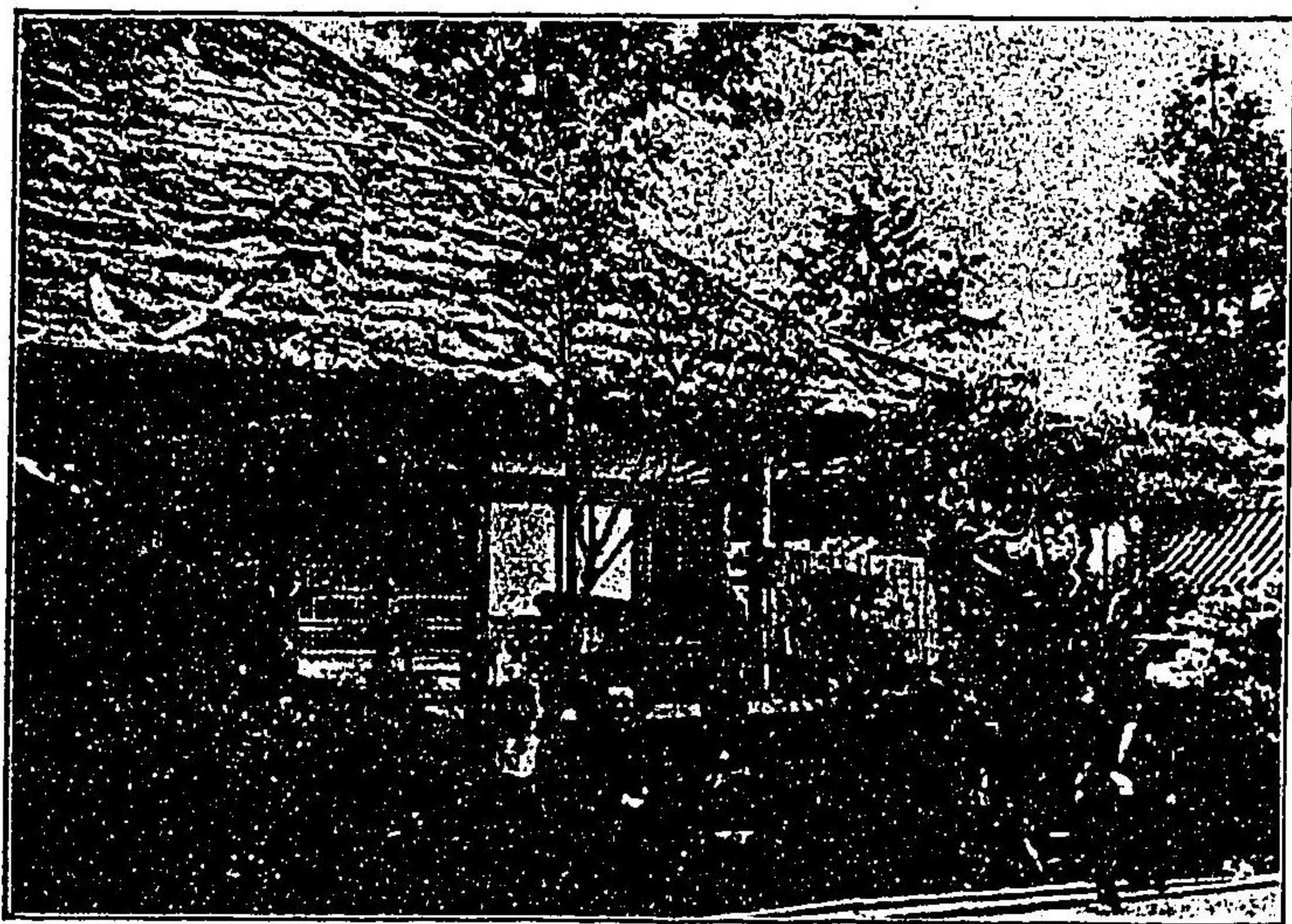
世尊寺趾 鷲尾山と號す、獅子尾阪の上に在り、明治八年頃に廢す、本尊釋迦如來長六尺八寸木製にして脇士は阿難、迦葉なり、各長四尺餘有り、抑も此本尊は放光佛と稱し日本にて佛像彫刻の初なりといふ、今は藏王堂の寶庫に納めたり、按するに當時未だ佛工有らず、故に畫工に造らしめたるものか、其他素朴にして古雅後世の金箔嚴飾の類と大に其趣を異にす、以て上代の風物を想見するに足るへし。

金峰山 上世御嶽と稱するもの是なり、峻峰嶮嶺起伏し、蜿蜒として南熊野より北吉野に亘り郡の中脊を爲す、笠捨山、地獄嶽、七面山、稻村嶽、東尾山、釋迦嶽、普賢嶽、深山、姥捨山、轉法輪嶽、千種嶽、孔雀嶽、大日嶽、彌彦山、山上嶽、天上嶽等は皆峯中の靈山と稱す、山中到る處巨巖聳峙し、巖脚多く洞窟を穿つ、十六窟、八宿、八大童子等の靈場あり、役小角創めて此山を拓てより世を追て佛法大に興り、圓山到處寺院の設けなきはなし。

大峰山 一に大仙山と稱す、金峰山中最も高峻を極むるものにして、前記諸峯中の三上嶽即ち是なり、海を抜く六千二百十三尺餘、三面は巨巖聳峙し、斷壁幾千仞白



金 峰 山



如 意 輪 堂

雲脚下に起り、臨むもの戦慄して膽を失ふ。鐘懸、壘、涌出壘、東瞰、西瞰、蟻門渡、平賀崑等を最も難所なりとす。山頂に巍々たる梵閣あり、是れ山上の藏王堂にして、役優婆塞小角自作の像を安置す。本尊は藏王權現、山伏修驗者の本家本元なり。

吉野八景 長峰彩霞、七曲曉櫻、金峰杜鵑、吉水庭月、塔尾暮鐘、雨師新緑、青根霽雪、苦清水霜葉、是なり。

吉野の詩歌 歴史上の人物として特に記すること無き代りに、吉野に關係せる詩歌より多くをこゝに紹介すべし。蓋し吉野の地たる、他の大阪といひ、京都といひ、奈良といひ、堺といひ、神戸といひ、都會として、人文の發達地として、毫も價値を有せざるに拘はらず、名所としては居然蜻蛉州裡第一位に居る者なれば、之に關する詩歌隨て多く、之が一二を擧ぐるに就ても多少の注意を爲さしるべからず。

○ 藤井竹外

古陵松柏吼天驄、山寺尋春春寂寥、眉雪老僧時歇帚、落花深處說南朝。

河野鐵兜

山禽叫斷夜寥寥、無限春風恨未消、露臥延元陵下月、滿身花影夢南朝。

梁川星巖

今來古往事茫茫石馬嘶休杯土荒春入芳心萬花白南朝天子御魂香

賴山陽

前度尋春花已闌今來暖雪照人顏十年纔補平生缺奉母重遊芳野山

大窪詩沸

北闕當年兇賊滿九重宮殿委塵埃數間第屋懸崖下曾作金城鐵壁來

藤井竹外

樵人牧豎說行公風雨滿山春已空我覓殘碑不辭遠行三十里落花中

篠崎小竹

藏王堂外形霞蒸如意輪邊香霧凝花似有心巡幸處翠紅千帳護山陵

谷如意

路入芳山夕錫裏春雲暖雪白層層千株萬樹花如海薰滿南朝天子陵

よし人のよしとよく見てよしといひし吉野よくみよよき人よ 天武天皇御製

くみ

みよしの、三船の山に立雲の常にあらんと我思はなくに

よしの川岸の歎冬吹風に底の影さへうつろひにけり 人 磨 貫 之

みよしの、山邊にさける櫻花雪かとのみぞあやまたれける 友 則  
春立つといふはかりにやみよしの、山も霞みて今朝はみゆら 忠 岑  
ん

水底に春や來るらんみよしの、吉野の川に蛙なくなり 醍醐天皇御製

都たにさひしかりしを雲はれぬ吉野のわくの五月雨の頃 醍醐天皇御製

みよしの、山の山守言問はん今いく日ありて花は咲なん 同

みよし野の山の白雪つもるらじ古郷寒くなりまさるなり 是 則

みよしの山の秋風小夜更けて古郷寒く衣うつなり 雅 經

とくくと落る岩間の苔清水くみほす程もなき住居かな 西 行

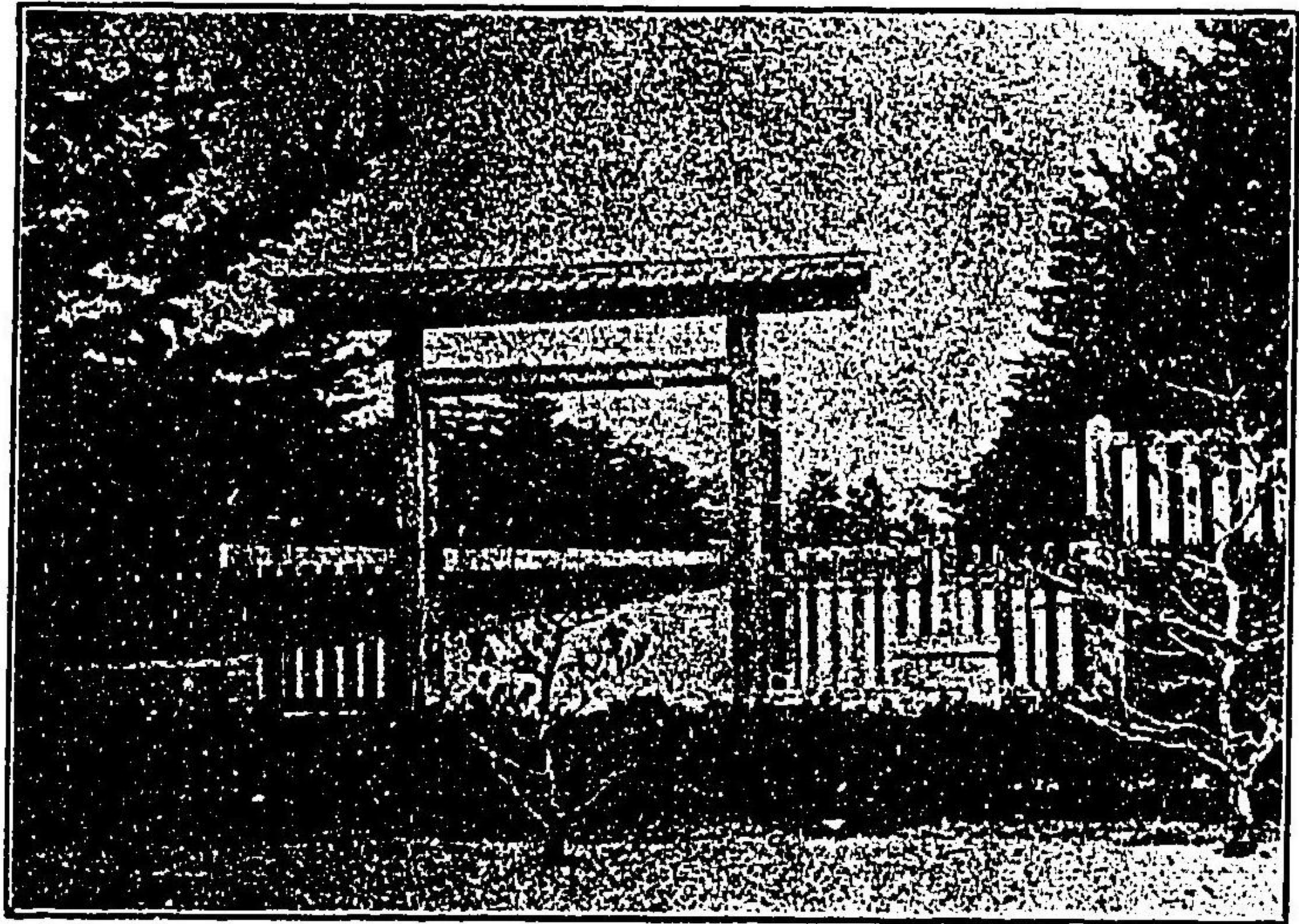
鷺の山御法の庭にちる花をよしの、嶺の嵐にらみる 良 經

名にしねふ櫻はいつか若葉して縁したるみよしの、山 不 知

吉野山こそねの花のいろくにねとろかれぬる雪のあけほの 秀 吉

君か代は千とせの春も吉野山花に契はかきりあらしな 家 康

この春は吉野の山の山守となりてころ知れ花のころを 蕃 山  
神代よりたふとき山といてましの宮しるしけむみよしの、山 宣 長



山 傍 畝



寺 隆 法

みよし野の青根か峯の白雪はまかひもあへぬ櫻なりけり  
吉野山かすみの奥はしらねともみゆるかさりは櫻なりけり

(一五六)

景 樹  
知 紀

これはくとはかり花のよし野山  
よそに何といふとも花やよしの山  
富士は雪花は一時のよしの山  
吉野にてさくら見せうそ楡木笠  
しはらくは花の上なる月夜かな  
礎打て我にきかせよ坊が妻  
露とくくこゝろみに浮世すかはや  
明星や櫻さためぬ山かつら  
歌書よりは軍書に悲し吉野山  
この翁去て吉野の花さけり  
吉野出て又ちもしろし三月菜  
雲を吞て花を吐なるよしの山

貞 室  
貞 徳  
鬼 貫  
芭 燕  
全 全 全  
其 角  
支 考  
大 江 丸  
全 村  
熊 村

花に遠く櫻に近し吉野川  
みよし野の近道寒し山櫻

全 全

此外奈良吉野一覽の序を以て瀛車の便を應用すべき畿内名勝を擧ぐれば、  
金剛山 大和鐵道北宇智驛より一里半に在り、海面を抜くこと四千尺、大和河内  
の間に跨り、畿内に於て金峰山に次ぐの高山なり、山上に登れば五畿はいふに及ば  
ず紀伊、淡路、播磨の諸山を眺囉の中に入るゝことを得べし、楠正成、千早城の跡は山  
の半腹に在り、

神武天皇御陵 關西鐵道櫻井線畝傍驛より降車して西南十二町に綏靖天皇御  
陵あり、その南三町の白樺村山本といふ處に在り、兆域周圍四百七十一間、宏規崇高  
森嚴にして犯すべからず、その南西に巍然とし孤立せるものを畝傍山と爲し、その  
正東凡十五町に形狀富士山に似たる低矮なる山を天香久山とす、

橿原神宮 神武天皇御陵の南方數丁街道の右方に在り、橿原皇居の古址にして  
明治二十三年神宮を創營されたるものなり、神武天皇、五十鈴姫皇后を齊祀す、官幣  
大社、

久米寺 橿原神宮の南方三丁餘に在り、白樺村大字久米に在り、靈神山東塔院と

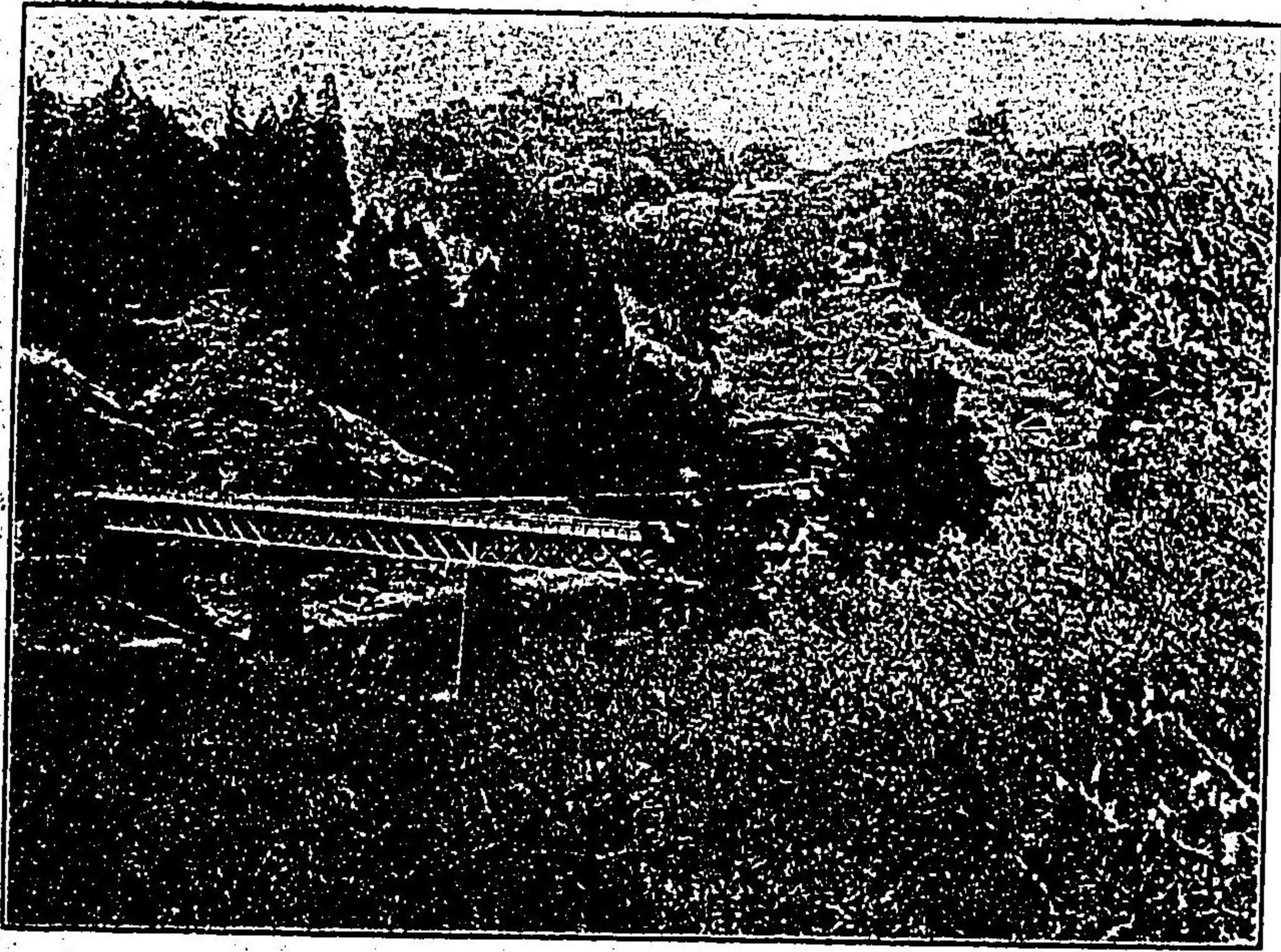
號す、聖德太子の御弟來目皇子の創建、仙人堂には久米仙人作十一面觀音及び弘法大師作の久米仙人像を安置す、この寺内の多寶塔は唐僧善無畏三藏留錫の際南天竺の鐵塔を摸したるものにて我邦多寶塔の權輿なりといふ、

橋寺 久米寺の南方二十丁に在り、聖德太子の建立今は頽廢したれども何となく巨剎の面影を殘せり、

多武峰談山神社 櫻井線櫻井驛より巽の方五十丁に在る山にして祭神は大織冠贈太政大臣藤原鎌足、別格官幣社、社殿の壯嚴言語に絶す、一里二里の道寄を爲すもたしかに參詣の價値はあるなり、

長谷寺 櫻井驛より一里半、初瀬町の北、初瀬山の半腹に在り、眞言新義派の大本山、豊山神樂院と號す、初龜元年、道徳上人の開基なり、古建築、古靈佛多し、牡丹花の名所なり、

笠置山 關西鐵道奈良驛より大佛驛、大佛驛より加茂驛、加茂驛より笠置驛にして、停車場を下る二丁の處則ち笠置の山麓なり、山城國に屬す、木津川の清流に沿ふて衆禪重疊の間に聳ゆる峻峯なり、天武天皇勅願の大寺なりしも、兵燹に罹りて今はわづかに一寺を存じ、笠置寺の名のみを殘せり、後醍醐天皇の行在所たりしは人



瀬の月



笠置山



の知る所なり、一丁ばかり隔て、笠置の温泉あり、

月の瀬　笠置驛より大河原驛、大河原驛より鳥ヶ原驛にして、停車場を下り人力車の便を借りて二里半、即ち月の瀬梅溪なり、伊賀大和の國境、尾山、石打、長引、桃香野月の瀬、遅瀬、廣瀬、嵩、白樫、治田諸村に跨りて二里に亘る一帯の梅溪を總稱して月の瀬梅溪と稱するなり、梅の吉野ともいふべくして我國第一の梅林なり、就中最も梅花多く奇勝に富めるに月の瀬、尾山、桃香野の諸村にして名張川を狭みし兩岸は、嶺となく溪となく、只だ是れ梅樹にして、花時には彌望一白、馥郁千里、雪か花かと疑はしむるばかりなり、敝谷、鹿飛、披窪、祝谷、菖蒲谷、杉谷、鶯谷、大谷等之を尾山八谷と稱し、いづれも相距る數百歩に過ぎず、滿谷梅花を以て埋めらる、殊に鶯谷上より一目千本を瞰下するところあり、月によろし、舟によろし、たとひ梅時ならざるも、避暑によろし、觀雪によろし、名古屋方面よりするものは上野驛より下るを便とす、頼山陽詩あり、

東風料峭雨絲斜、泥滿芒鞋一路賒、誰引老夫來喫苦、直將鞍手罵梅花。  
然れども今は流車の便あり、人車の便あり、酒樓、旗亭の稍々完全なるものあり、竟に遊客をして梅花を罵らざらしむるのみならず、羅浮美人の色香に歸るを忘れざら

しむる也。

(一六〇)

四條畷 關西鐵道支線網島線の四條畷停車場より下車すれば東五丁にして四條畷神社あり、飯盛山の中腹に鎮坐、楠正行を祭るは人の知る所なり、停車場の西北三丁許に高さ樟樹の繁茂せる町に大石碑建てり、高三丈五尺にして「贈從三位楠朝臣之墓」と刻せり、正行の戦死せしは此邊なるべしといふ、神社の鳥居より北三丁高野街道に和田賢秀の墓あり。

牧岡神社 四條畷驛より大阪に向ふ次の驛なる住道停車場より一里餘の所に在り、官幣大社、神武帝の御宇種子命の創建なりといふ、祭神は天兒屋根命、姫神、武甕槌神、住津主神の四座、社後を牧岡といふ。

瓢箪山稻荷 牧岡神社の南五丁に在り、運氣縁談等辻占の根元として世に名高し、その山の瓢箪に似たるが故に此名あり。

當麻寺 關西鐵道支線櫻井線の下田停車場より南凡そ三十町にして有名なる中將姫が蓮莖陀羅を織りたる靈場なり、二上山萬法藏院禪林寺と號す。

擧ぐべきの名勝なほ多しと雖著名なるものゝみを撰びて其他は略し、更に大阪に立歸り、南海鐵道の便を借り、堺方面の名所廻りを爲さんとす、詳細なる案内を得ん

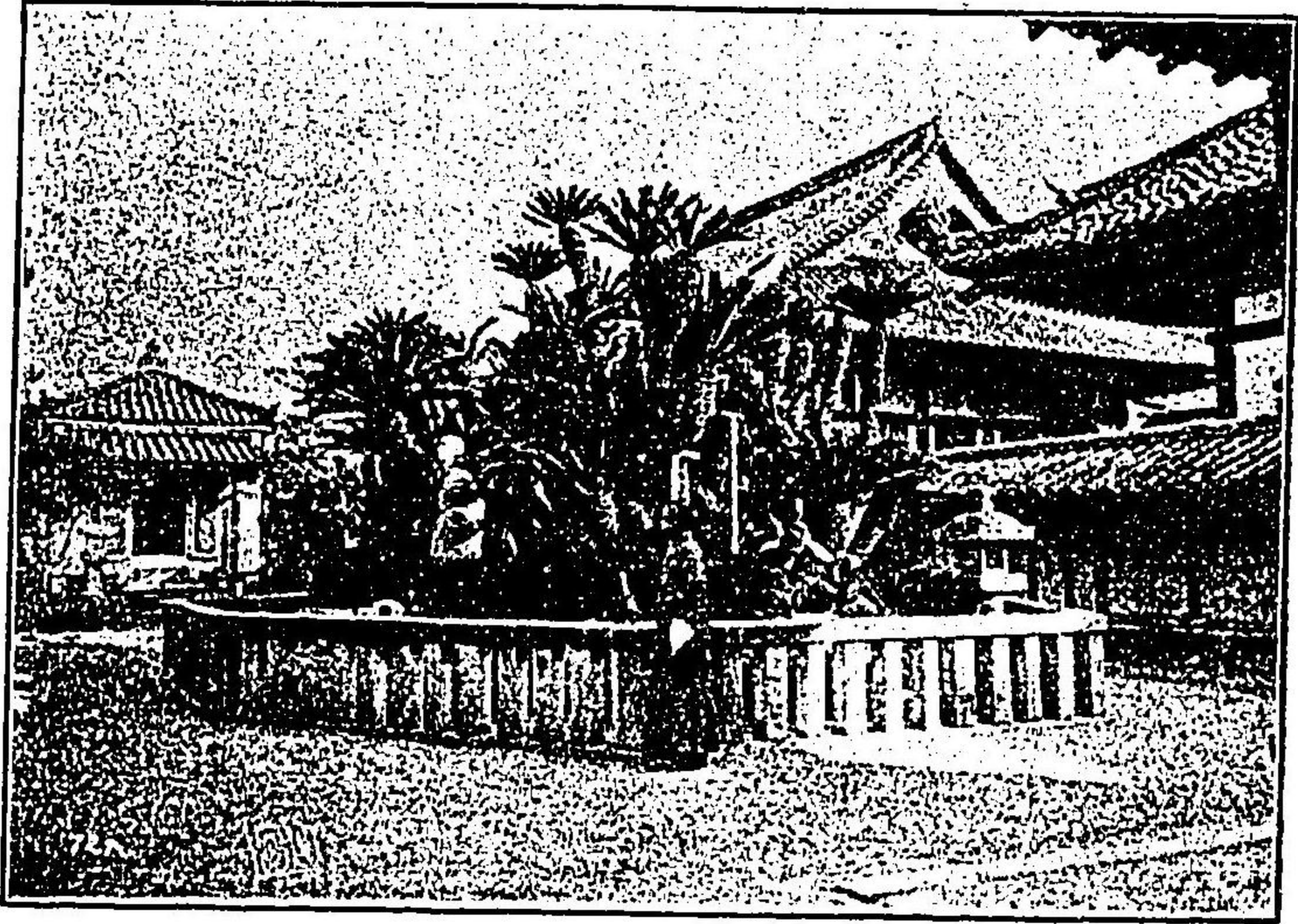
と欲せば、暫らく忍んで著者の筆先に注意せらるべし、南海鐵道の起點は大阪市南區難波新地六番町に在る難波停車場なり、こゝにて安部野を見、安部野神社に詣づべし、次の停車場を天下茶屋驛とす、天下茶屋村に在り、名物和中散薬名の祖先津田是齋と、林源次郎が父の仇當麻三郎右衛門を討取りたるとの二にて有名なり、丸山といへる處には吉田兼好の古蹟として石の寶塔立てり、其次は住吉停車場、其次は大和川停車場、其次は堺停車場なり、これ等は皆堺の名所として見物すべきものなれば一括して堺の案内に取りかゝるべし、住吉は攝津國にして堺は和泉國なるに拘はらず、住吉といへば誰も大阪の住吉といはず、堺の住吉と古より言ひ傳ふる人の言の葉も仇にはならじ。

### ○堺

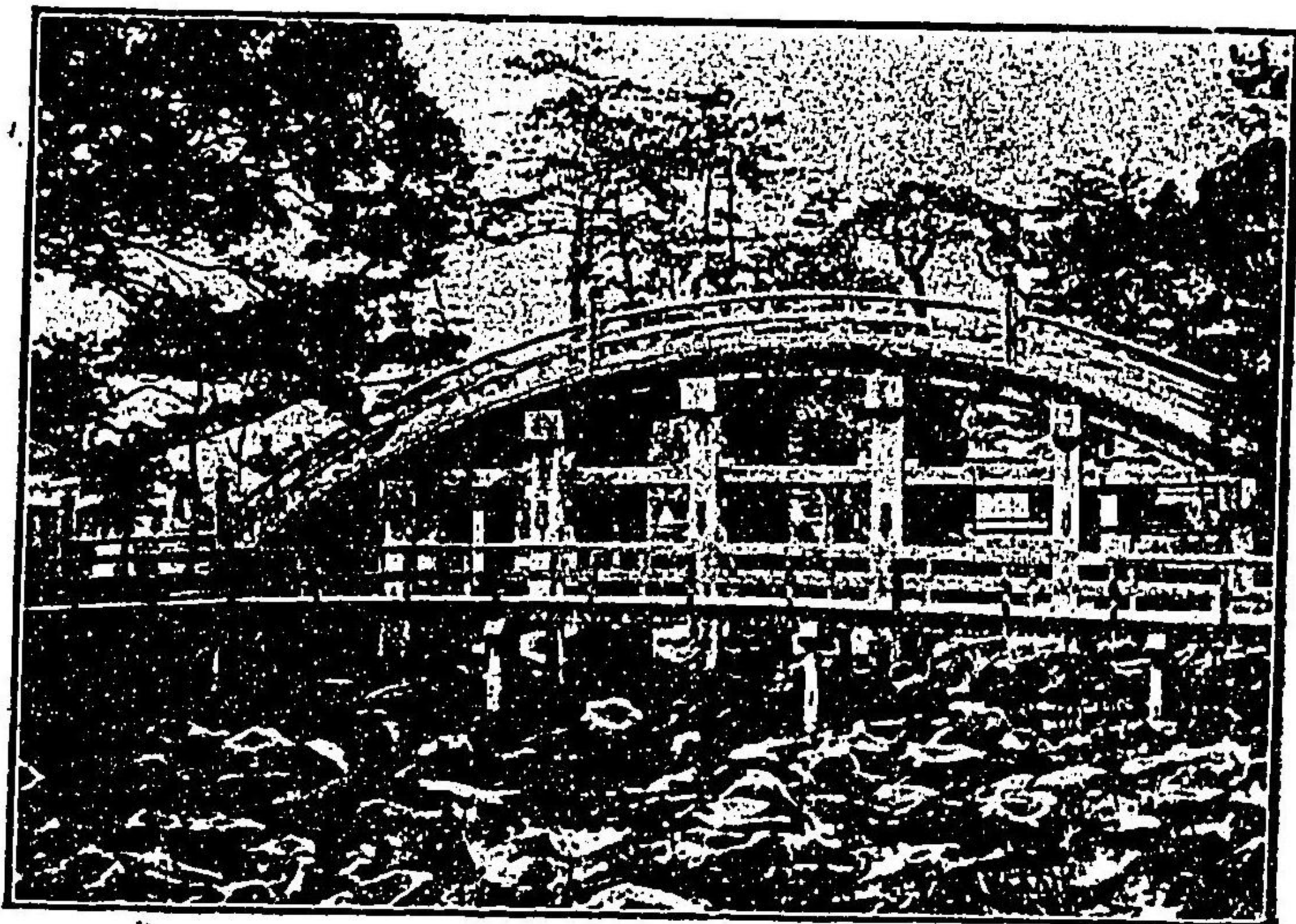
和泉國の北端大鳥郡に屬し大和川の河口に沿ふて西に堺港を擁し、市坊一百九十五ヶ町あり、堺の名は攝津河内和泉三ヶ國の境に在りといふの意にして、足利時代には山名大内三好等此地の守護職たり、城を泉府と稱し、日本唯一海外貿易の開港場たり、豊臣氏の時に至り繁華の幾分を大阪に分たれや、衰微を來し、徳川氏の時に及んで海外貿易を長崎に移されしより益々衰微し、今日の状態となれり、されど

なほ戸數九千三百、人口四萬七千を有し、商業工業頗る發達す、徳川氏の時には堺奉行あり、明治の初年一時堺縣を置かれしもなほ地の要樞なるは認められしなり、名所舊迹の多かるは其古き土地なればなるべし、こゝには南海鐵道線に於ける住吉大和川、堺湊、濱寺、大津、諸停車場より下車して探るべき名勝舊蹟を堺及び堺附近として一つに纏め、一案内することゝすべし、京都を案内せし例に倣ふなり、

住吉神社 住吉停車場を距る二丁餘に在り、攝津の一の宮にして官幣大社たり、祭神は底筒男命、中筒男命、表筒男命、神功皇后なり、傳に曰く神代の昔伊弉諾尊日向國小戸の橘の青木が原に紱したまふ時海底より現はれ玉ひし御神にて、神功皇后三韓征伐の時靈驗あり、其後皇后に吾和魂は大津の淳中倉の長峽に居り、往來の船を見んと神託ありしよりこの住吉の津に鎮座したるなりと、皇后攝政十年辛卯四月二十三日建立にて今に至るまで凡そ一千六百有餘年、官府よりの造營修繕連綿として今に絶えず、其社殿の構造三社の進むは魚鱗の備、一社の開くは鶴翼の圖を顯はし所謂八陣の法に依りては三韓平治の功德を賞して軍陣として祭られたるに因るとなん、之を住吉造りと申すなり、境内の廣さは東西九丁南北四丁、四方の鳥居の東西百九間、南北百八十間、昔は神稅二千六百石、神主は津守氏を上位として



寺 國 妙 界



社 吉 住

社の役人三百六十餘人なりしといふ、津守氏は華族に列せられ今尙ほ社務を司れり、攝社無數にして一々擧ぐれば追あらず、古蹟には神馬舎、沓石、誕生石、反橋、神木橋、駒止石、長峽橋、鶴橋、獨梁橋、龍橋、玉出櫻、忘れ水、住之江池、遠里、小野、判官松、岸の姫松、高燈等、到る處古歌古詩中の物にあらざるは無し、社殿の結構、境地の秀麗、殊に山水の眺望に富みたるは、蓋し神社として日本第一の名を附するも、決して溢美にあれざるべし、

牀菜庵古蹟

住吉阪の井村に在り、一休禪師の庵室ありし所なり、

住吉公園

住吉神社の前の松原、即ち高燈籠の在る邊をしかく名づくるなり、

小町茶屋

むかし住吉の松原に席を設け、長柄の杓に茶碗を添へ、去來の人に茶を勧めしもの、今は安立寺町の北端に名残の茶店残れり、

笹の松原

今は安立町といふ町續きとなり、僅かに七本の松を存するのみ、

妙國寺

日蓮宗の一本山、日公上人の開基なり、明智乱の時、徳川家康此寺を旅館とせり、有名なる蘇鐵の古木は方丈の前に在り、幹の高三間餘、大枝二十三本、小枝七十八本、四方十尺に達し、三百余年の星霜を経て益々繁茂して、堺名物の一たるなり、地内夥多の寶物を藏す、

土佐十一士の墓　妙國寺の北測寶珠院といへる寺の裏手に在り、明治の初年土州の藩士堺港警衛の際、佛國人の無禮を憤り、之を殺害したる罪により、箕浦元章以下十名妙國寺にて居腹を命せられる屍体を埋めし所なり。

西本願寺別院　院神明町に在り、文明年中櫛木屋道順自己の居宅を割いて當院を建立し、蓮如上人に献じたるものなり、信證院と稱す、本堂書院對面所等、いづれも美麗にして、黒書院の畫は探幽の筆、其外の間、に古法眼の鶴、敬甫の鮎等の名畫を見るべし。

東本願寺別院　戎町に在り、本尊の阿彌陀は聖徳たるの作なり。

菅原神社　日本七天神の一にして、東本願寺別院の西に在り、小西行長寄附の松和泉式部の塔、連歌所等あり、神体は菅公自作の像と言ひ傳ふ、神殿巍々、樓門亢々、開口神社　南甲斐町に在り、三村の社又は大寺といふ、住吉の外宮なりとなり、昔は兩部に於て重乗山念佛寺といふ寺ありしが、維新の始破壊せられ、今は塔のみを有ぜり、南門の前に名物大寺餅を賣る。

名越の岡の舊迹　宿院といふ、住吉の御旅所なり、永隆の歌に名高し、こゝに飯匙の池といふがあり、龍宮より得し千珠を納めし所といふ。

松の寺　大町に在り、龍谷山祥雲寺と號す、禪宗、本尊は聖觀音、開基は澤庵和尚、方丈の庭に名高き五葉の松あり、枝葉左右に流れて八九間、高さ一丈五尺、其形涼笠五蓋を風流に重ねしが如し、豊太閤の鉢に植ゑて愛玩せし松の生長したるなりと傳ふ、繪畫彫刻の寶物甚だ多し。

方違神社　此邊を三國が丘、又は三國が衢ともいふ、攝洲原の堺といふ意なるべし、祭神は神功皇后にして、皇后征伐の時、天神地祇、三千百五十餘座を勸請し、凱旋の後、葦の葉に壇を包み、方違の稜を有して鎮座ありしところをいふ。

百舌耳原北陵　方違神社の南手に接續する丘陵に在り、反正天皇の御陵なり、周圍二百五十間餘、南方に參拜所あり、松、楓、櫻等池水に映じて、風色頗る清雅の地、このあたり一帯の丘阜、堺市の全景と、茅停の海の半面と眺望するに宜し。

天王の森　御陵あり、東に距ること一丁、俗に東原社といふ、祭神は素盞雄尊、左右は王仁と菟道雅郎子命なり、神殿方違神社に劣らず、いづれも堺の名社なり。

天王山紅谷庵　禪寺なり、土地高燥、眺望あり、雅趣あり、連歌師牡丹花宵柏晩年こゝに住居せりといふ。

大仙陵　紅谷庵の南三丁に在り、仁徳天皇の御陵なり、陵外の堤千二百八十間餘

周囲に池あり洋々として湖の如し、兆域の大なること他に其例を見ざるべし、四邊に御倍塚九基あり所々に散在して自ら林丘の趣を爲せり、

履仲天皇御陵　大仙陵の西南四丁に在り周囲の堤八百三十三間、

万代八幡宮　御陵より南面十丁餘の處に在り、仁徳天皇酒の君をして鷹を飼は

しめし地なりといふ、祭神は應神天皇、住吉春日、神功皇后の四座、

龍興山南宗寺　堺市第一の巨刹にして、禪宗、弘治二年三好元長の建立、大林和尚

の開基なり、其後數度の兵燹に罹り荒廢に屬せしを元和の頃澤庵和尚再建し、侯伯

多く之に助力を興へし爲め、この大伽藍を見るに至れり、寺域六千五百餘坪、佛教を

大雄寶殿と稱し、左檀に徳川將軍代々の位牌を安ぜり、諸殿諸堂の扁額いづれも宋

元明及び我國大家の筆に成るものなり、古大家の名畫亦た少なからず、牡丹花宵柏

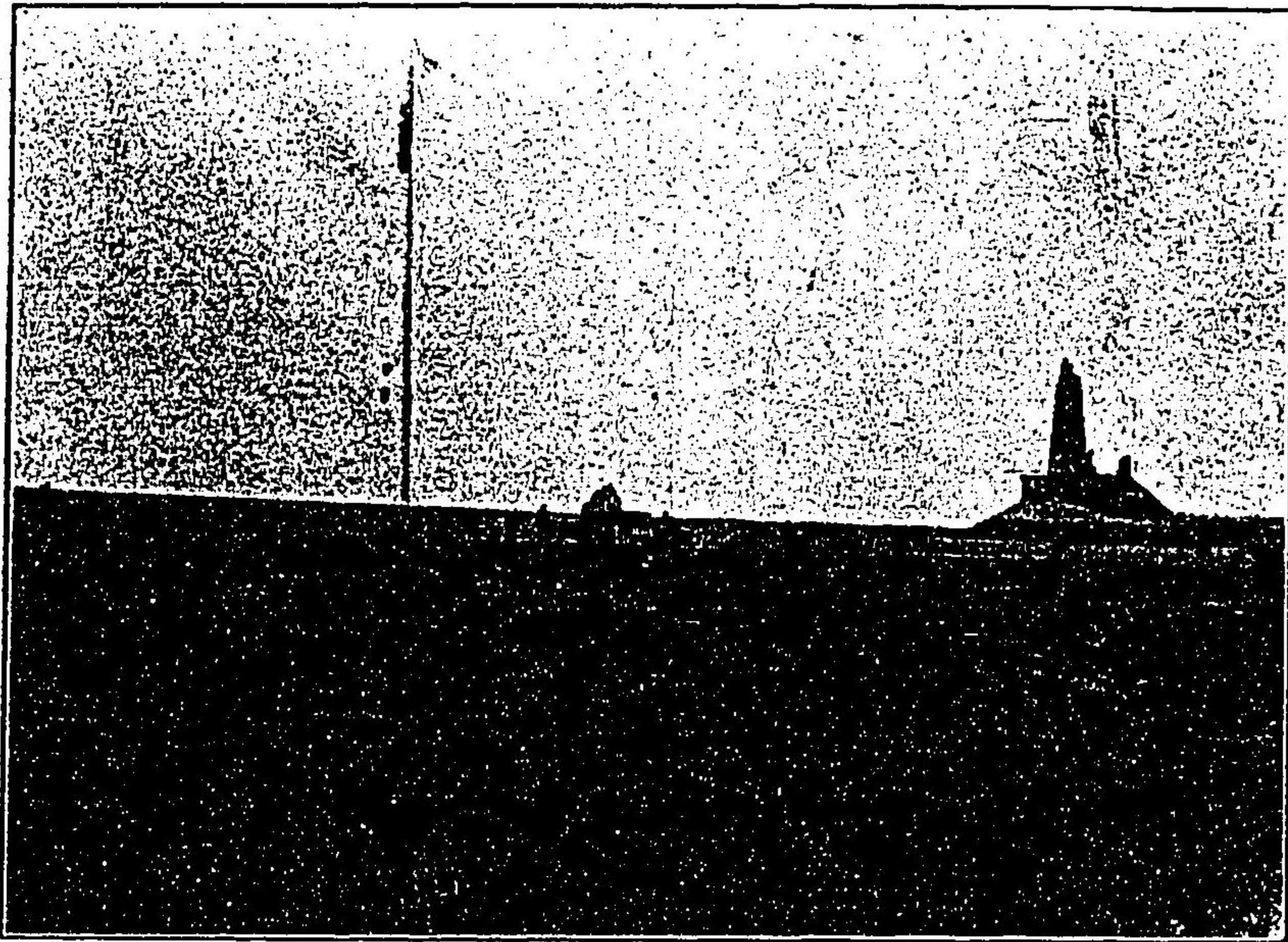
の塔、一閑齋銘鷗の塔、利休の塔、趙陶齋の塔等あり、南隅に東照宮の祠あり、其床下に

無名の墓あり、俗説に家康平野の焼討に眞田幸村の爲に追はれ、逃げ來る途中敵の

爲に害され、首級を爰に埋めしなりと蓋し、齋東野人の語のみ、明治十一年此寺に於

て博覽會を開かれし事あり、

大安寺　禪宗、開基は環中和尙なり、當寺は有名なる呂宋助左衛門の書院を寄附



堺 大 濱



濱 寺

して佛殿となしたるものなり、傳に曰く、助左衛門の書院當時の建築に在て結構善美加之海外の珍什室に満ち、實に人目を驚かす、松永久秀一日助左衛門の許に來り其美を見て曰ふ、滿つれば缺くるものなり、余其盈を缺いて禍を未然に防がんと、乃ち刀を抜て柱を斬る、今に至りて大安寺の佛殿其刀痕を存ずと謂ふ、

少林寺　禪宗、桃源和尚の開基、往昔は堺市屈指の大刹なりしが、漸次荒廢して今に至れり、寺中に稻荷の祠あり、當寺の塔中に住せし白藏主の信仰せし祠にて白狐を祭るものと云、狂言の釣狐は此祠に由緒あるを以て彼狂言を爲すには此祠の後手の藪に生する竹を以て杖となすと聞く、

大濱公園　前は茅停の海に臨み、後は陸軍所屬の舊砲臺を控へ、波防の石堤遠く海面に突出し、其處に燈臺あり、むかしは此邊總て漁村なりしが、眺望の佳なるより四民群遊の所と爲り、酒樓旗亭、和風洋製、三層四層相連なり、月に宜しく、雪に宜しく、朝に宜しく、夕に宜しく、魚は鮮にして酒は甘く、避暑に適し、療養に適す、紅粧笑ひ、絃歌湧く、雅俗の同じく見て仙郷の思を爲す所なり、この公園より北に當り、港灣を巡りて築出したる地先、舊砲臺の中に、區域最も廣き公園あり、北大濱の公園と稱す、陰曆三月三日には大汐と稱し、潮水遠く退きて數里の間干瀉となるより、來つて汐干

狩を爲すもの無数なり

新川 享保年中江戸に生れし吉川俵右工門といふ人の堀割りしものにし新築港なり、灣内には和船洋船檣林立す、大濱公園の斯の如く盛なるは此港あるが爲めなり、

一路山禪海寺 湊停車場より下りて至るべし、禪宗洛西仁和寺一代の門主たる地位を抛つて、こゝに幽栖し詩歌を咏じて清貧を樂みし一路居士の開基なり、一休禪師と同時代の人なり、

春懸松 禪海寺の境内に在り、居士爰に閑居し、人の往來を絶し、一箇の春を松枝より釣下し、有志の人に食物を受けて命を繋ぎ居たるが、一日村童戯れに春に投するに馬糞草鞋等を以てせしかば、一路之を見て、我糧則ち盡たりと爲し、爾來斷食して終りしといふ、

家原寺 禪海寺より東南十五六町に在り、山號を一乗山といふ、行基僧正の開基家原の名は行基誕生の地なるが故に命せしものにて、無双の靈場なり、本尊は文殊菩薩、建築には本寺、多寶塔、不動堂、祖師堂、藥師堂、清涼院等にして、行基戒壇の迹、鎮守の社、誕生木、龍六、經塚、關伽井、放生池、樓門跡、辨財天社、聖天尊社、其他探るべし、寶物甚

だ多し、

家原の城趾 戦國の頃寺町左近、雀部次兵衛城を此家原に築きて威を震ふ、永録十二年正月元日三好笑岩齋の爲めに攻落され、廢墟と爲る、

似雲の示寂地

家原寺の西一里半に奇人似雲法師の没せし舊跡あり、

濱寺公園

濱寺停車場を下りて第一に趣く可き名區なり、南北二十町、東西十町

濱寺は元享年中三光國師の開創にして、寺號を大雄寺と稱し、封境頗る廣大、七堂伽藍巍々たりしが、桑滄の變に廢墟と爲り、今は僅かに其名稱を存するのみ、此邊一面の眞砂地にして古松多く西に淡路島、北に須磨、明石、一の谷等を望み、南に紀伊の海四國の山を眺め、風景絶佳なれども、大阪を隔つる遠きが爲めに來遊の人少れなりしが、停車場新設以來、旅館酒樓次第に増築せられ、大阪、堺、貝塚、岸和田より遊客日夜群集し、將に大濱公園と其盛を争はんとするに至れり、

高石の濱

所謂たかしの濱にて公園内に在り、白砂青松綠波に映じ、殊に古松の名所なりしが、明治の初年或人開拓の企を起し、其松を採伐せしが、時の内務卿大久

保利通此地を過ぎ、名にしたふの歌を詠じて名所の頽廢を愛しみしを其人聞きて、實にもと悟り、其事業を中止せしかば、今日なほ多少の古松を存して其名所をと



むるを得たり、

(一七〇)

大鳥神社 濱寺より東北七八町、官弊大社和泉の一の宮なり、祭神は日本武尊、境内の坪數一萬二千九百二坪、其内建物の敷地二百九十坪以上あり、古松老杉の間に結構壯麗なる社殿諸所に建てられ、神威嚴然として在すが如し、社地に六百餘坪の梅園あり、

和泉宮 珍努の離宮の舊地にして、後鳥羽天皇熊野御幸の砌、此に行在せられしといふ、

葛葉神社 信太村の信太森に在り、祭神は宇迦の御魂命と葛葉姫、所謂俗傳に云々する安部晴明の母を此森の狐なりとするは社傳にも残れり、

卷尾山仙樂院施福寺 行滿上人の開基、天台宗、西國三十三ヶ所の第四番の札所なり、濱寺停車場よりも、大津停車場よりも、岸和田停車場よりも、三里許の路程にして、和泉の比叡、高野ともいふべき名寺なり、

阿彌陀山松尾寺 役十角の開基、天台宗、用明天皇の勅願所にして、卷尾山に劣らぬ名寺なり、

牛瀧山大威徳寺 岸和田停車場より行くを順路とす、兼學の大寺にして、昔は四

十餘の坊の寺院ありし由なるが、今は本坊(眞言宗)殺屋坊(天台宗)の二坊を存するのみ、有名なる瀑布あり、第一の瀧二丈、第二の瀧十丈、第三の瀧四丈、紅楓満山、瀑水に映じて天下の絶奇、詩文の人必ず此に遊んで詩賦なかるべからざる所なり、蓋し牛瀧の紅葉といへば、高雄通天れも劣らざる所なり、

著者はあまりに筆を走らすに過ぎて、堺をあまりに遠く隔たりぬ、いざさらば更に堺に立歸り、更に足らざるを補はん、

吾彦の觀音 吾彦山山中坊不動院に在りて、名高き靈場なり、

高須遊廓の迹 堺市旅籠町櫻の町東貳丁に在り、昔は有名なる遊女町にして、一休禪師が地獄大夫と問答したといふは此地なり、今尙ほ舊形を存するの家二三軒残れり、

殿馬場 妙國寺の南に在り、幕府時代には奉行屋敷の在りし處なりといふ、今は官衙學校軒を並べ、洋風の建築立ち續く、

南新地 堺に於て最も新しく築き立てる所なり、青樓軒を並べ、龍神町榮橋の二に分る、

龍神町 は貸座敷七十餘、娼妓六十餘、藝妓八十餘といふ、堺市第一の遊廓なり、

(一七一)

榮橋　　は貸座敷四十余、娼妓二百四十余、而して藝妓無し、此遊廓の西は即ち前に  
舉けたる堺の港なり、

魚市　　毎朝未明より漁船大滾に集りて市を開く、數百の商人四方より集り、先を  
争ふて魚を買ふ、一奇觀なり、

酒と緞通　　清酒は堺第一の名物にして、其大なる者宅徳平、鳥井駒吉、肥塚與八郎  
其名酒造家甚だ多し、之に次ぐものは緞通にして藤本、三谷、大野など其製造家とし  
て有名なり、

堺の官私衙　　堺市役所、堺區裁判所、收稅署等は殿馬場に、警察署は市之町に、電信  
局は宿院に、郵便局は熊野町に、商業會議所は市之町に在り、

歴史上の人物　　往昔に於ける日本唯一の開港場、東船北馬、朝來夕去の地なれば  
歴史上の人物の此地に關係せしは少なからずと雖、此地特殊の人物としては別に  
誰をと指し難し、家原出身の行基僧、正菩薩とまで崇められし大宗教家、是れ或は堺  
界隅の産物として歴史に貢獻したる人物の王なるべし、而して一休禪師、澤庵和尚  
亦た此地に關係あり、一路居士の如き亦た然り、事業家として、呂宋助、右衛門は天正  
時代の錢屋、五兵衛なり、原田孫七郎亦た此地に關係を有す、近くは新川堀割者たる

享保の吉川倭右衛門あり、身は江戸の一商人にして高野詣での際、此地の形勢を見  
築港の事を時の奉行に建議したるも許されず、剩さへ投機師を以て目せられ、困  
に呻吟すること十五年、しかも歌々たる一片の氣毫も衰へず、出獄の後始めて官許  
を得、竟に新川堀割を爲し、堺港をして今日の盛あらしむ、豈一偉人ならざらんや、大  
内義弘は此地に戦死し、三好の一族をはじめ、松永久秀、明智光秀は屢々此地を往來  
して、堺とは輕からぬ關係を持てり、連歌師牡丹花宵柏、茶人千利休、畫家狩野永徳、其  
他數へ來れば車載斗量かぎりなければ、さまではとて略しつ

堺の詩歌　　日本唯一の開港場たりし歴史はあれど、文學的の歴史は少きなり、

○  
界浦舟中　　藤井　竹外

波戸無風漁市腥。夕陽舟過古茅停。淡山看入浮嵐去。還自鷗邊露寸青。  
一路寺　　一路　居士

節後菊花吹不飛。羅根臥雨似薔薇。萬年峰頂新長老。笑下禪牀對布衣。  
寶珠院　　失　名　氏

浮圖寂莫鐸聲悲。浦上秋風落日時。俠骨千年何處是。苔蒸十一義人碑。  
(一七三)

半是紅嵐半翠嵐。重重楓葉壓山庵。會遊如夢吟衣冷。清磬秋高牛石潭。

○

ゆけとなほ行きやられぬはいもかうむをづの浦なる岸の松原  
西の海やはさが原の浪間よりあらはれ出てすみよしの神  
みな月のけふのさかひにみそきして千歳をのふる神の宮人  
住吉のさしうつ浪と見ゆるかなまつの木かけに殘るしら雪  
住吉のまつと知りてやほととさすつもりのうらに初音鳴くら  
ん

今日をのみ秋のさかひと聞きしかといつもさひしき浪の音か  
な

音に聞く高石の濱の仇浪にかけしや袖のぬれもこそすれ  
暮ぬとてさても覺へす紅葉はの下てる山の入相のかね  
何としていかに焼けはか和泉なる横山炭の白くなるらん  
岸の上に庵しをれば川音の枕をくゝる夜半を涼しき

貫之 兼直 家隆 公景 清重 不知 大輔 法親 光俊 契冲

名にしちふ高石の濱の松か枝も世の仇波はのかれさりけり

○

すみの江の波の鼓や松はやし  
怨籠かりて淡路へのらん汐干かな  
月花に悲しき下手の蛙かな  
白雨に面もふらす初轡舟  
ねほけなくこの文塚やかへり花  
高燈籠はるゝ虫の死のところ  
古沼のすゝきも見えず妙國寺  
鹽かまといふへき花やうらの波  
連歌せは只牡丹花のさかりかな  
ひとり立つきしの姫松めてたさよ  
驥の歩み二万句の蠅あふきけり  
蘆の葉を手より流すや冬の海  
すみよしに松こそ笑ふ山かつら

利通 令徳 如泉 許六 諷竹 淡々 不知 重頼 同貫 鬼貫 其角 同江 大江丸

白鷺のかすみこほすや松の陰

蟹とりて甲に物書く沙干哉

火を替るさかひの町や秋の風

同 同 同

大阪を中心として畿内の名區其主なるものは普ねく紹介し盡せり、曰く京都、曰く奈良、曰く吉野、曰く堺、曰く其附近及び其他の有名なる神社佛閣、名所古跡、偏に漏れざらんことを力めたり、而してなほ一の大なる者を遺せり、何ぞや、大阪梅田停車場より西に向て瀛車を走らす時、驛夫の呼ばるゝ停車場は、曰く神崎、曰く西の宮、曰く住吉、曰く三の宮、而して其次に神戸々々の聲を聞くなるべし、我邦五港の一にして東海山陽の鐵路相接する處、真個日本一大名區、

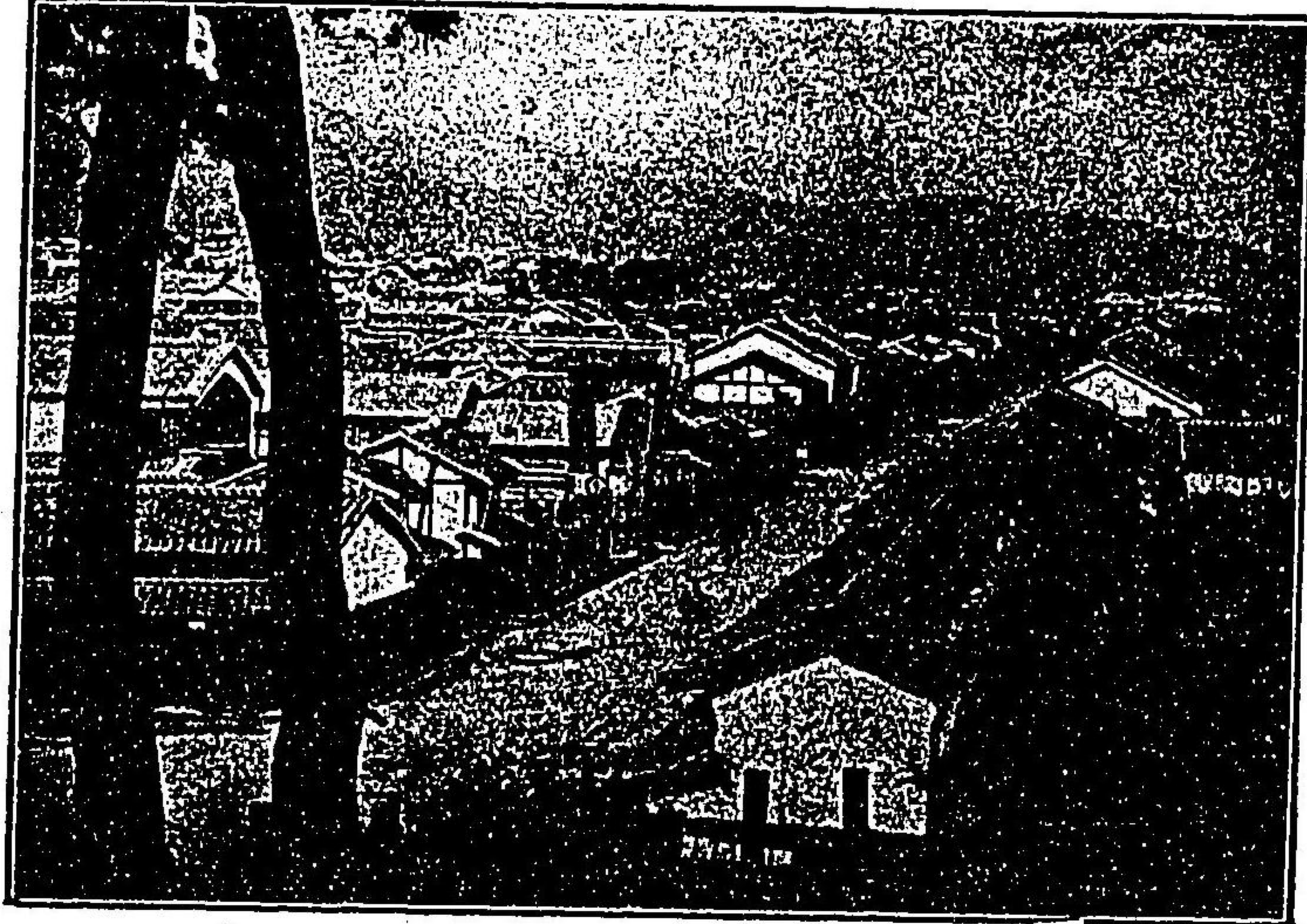
○神戸

如何なる手ありてか、かゝる短日月に此一帶の砂濱を化して、二十五萬の大都となせしぞ、東洋の有數の要津、月々の貿易百萬を以て數ふるなり、と外字新聞をして讚嘆せしめし神戸は、實に其言ふが如く、今より四十年前は、見るもいぶせき寒村僻落なりしなり、歴史には孝徳天皇の大化革新に始めて兵庫を茲に置かれたるを最

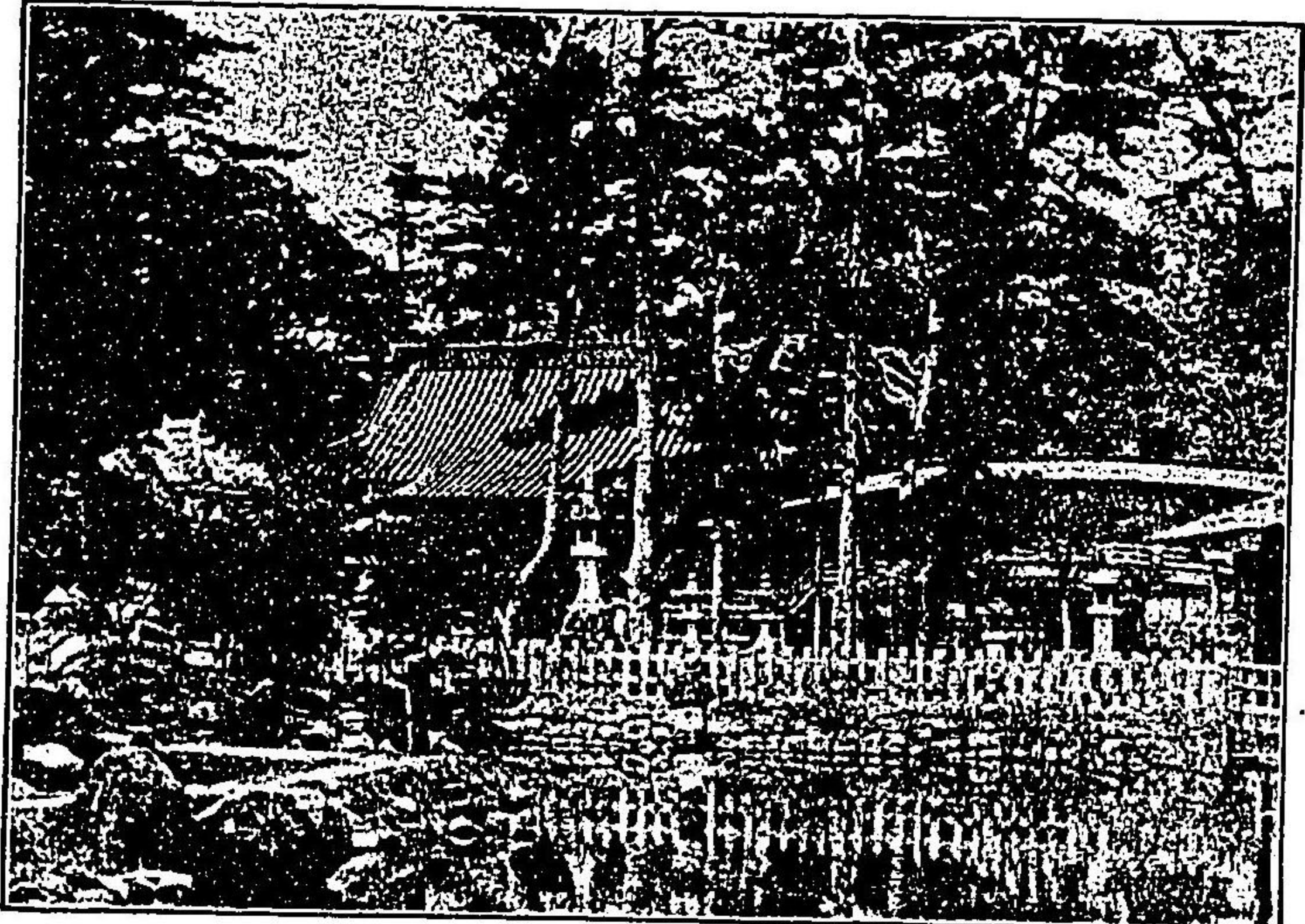
も古き出来事となす、七百年前平清盛此地を愛し、一は海山の風光の勝れるより、一は海陸縦横の便あるより、別荘を此地に建て、つひに帝都をこゝに移すに至れり、その時は規模の廣狹はさて置き、兎にも角にも都なり、宮殿、邸宅、市街等多少の經營はありしならん、然るに源平の戦は平家遂に没落に及ひしかば、宮居は忽ちに焼き拂はれ、新都是暫時にして廢墟となりぬ、それより後、歴史上の關係は決して少なからざりし中にも、楠正成が僅少の兵を以て足利の大軍をこゝに喰ひ留め、終に淡川に討死せし一時は、兒童走卒と雖、今に於て艶稱する所なり、而して豊臣秀吉が大坂城を築くや、兵庫の地の大阪と最も關係深きを看破し、西よりするの貨物を堺港によらずして兵庫港により陸上げする事ありしより、兵庫は一箇の要津となり、徳川氏の時代に至りても廢せらるゝには及ばず、天明八年には戸數五千、人口貳萬と注せられたり、然れども今の神戸の地は依然たる寒村僻落にして、試みに淡川堤防に立ちて、東方を望まんか、道は十町弱にして、茅舎鷄犬の邑、道幅二間許り、兩側には並木松廿餘本、之れ西國街道なり、下りて街道を西に進む、數町路傍に石標あり、從是左幾町楠公碑あるを示す、之に隨て蛇の如き細徑を踏み行けば、赤松數株の下、蕭條として嗚呼八字の碑の立つを見る、豈知らんや此石標の立ちし所、是れ今日の神戸停車場

塙前にして蛇の如き細徑は、今日神戸に於て最も繁華の市街たる多聞通ならんとは、而して安政四年十二月井伊掃部頭の斷然たる外交政略を神戸の開港を許したりしかれども京都の反對ありし爲めこれを實行するに至らず、慶應三年十二月七日に於て初めて開港の式を擧ぐ、明くれば明治元年は即ち王政維新第一の歲にして其二月五日には運上所を開き、其五日には今の太勳位侯爵伊藤博文、從五位伊藤俊介の名を以て兵庫縣知事に赴任せり、爾來日に月に進歩して今日の盛を見るに至りしは、吾人が云々を要せざる所、無論此名勝要覽に喋々するに及ばざる所也

湊川神社　神戸に於て湊川神社を知らざるは、大阪に天満天神を知らざるが如く、京都に平安神宮を知らざるが如く、奈良に春日を知らざるが如く、堺に住吉を知らざるが如し、別格官幣社祭神楠正成、委しきことはいはずもがな、元祿五年徳川光圀其臣佐々助三郎を遣はし、在來の楠墓を修し石碑を建てられしより人の注目する所となり、天下の志士斯碑前に涕淚を麗ぎて勤王の心を奮起せしもの少なからず、結果は王政維新と爲り、明治四年を以て時の神祇官より當時の兵庫縣令へ造營掛の命令下り、五年を以て宏壯なる社殿落成す、即ち此社なり、明治七年七月十二日楠公へ正一位を贈られし紀念日なるより、毎年同月同日に官祭を行はる、境内は大



神 戸 港 景



四ノ宮姫子社

阪の千日前、東京の淺草と同じく最も繁鬧を極むるなり。

嗚呼忠臣楠子之墓

湊川神社境内に在り、すなはち徳川光圀の建てられしものにして、碑面の八字は光圀の筆にして、碑裏は明の處士朱舜水の楠公贊を刻せり。

長田神社

兵庫西長田村に在り、大國主命第一の御子事代主神を祭る。延喜式内の神社にして宮幣縣社、有名なる儼神事あり、境内に多くの鶏を放ち、繪馬に鶏の畫多し、蓋し祭神むかし神功皇后に託誼なり、鶏聲を聞くの處是れ我地と仰せらし爲め、此に斯神を奉祀するに至りしを以て此の如しと、氏子は終生鳥肉を喰ふことを禁せられ、婦人わ其齒を添ひるにも鳥の羽を用ひずといふ、俗に運の神と稱す。

生田神社

三の宮停車場を東二三丁の處に在り、祭神は天照大神の御妹雅日女尊にして、官幣小社なり、祭典に提灯の數多きは最も奇觀とす、社内には生田の森、生田川、生田の池、籠の梅、敦盛萩、梶原の井、其他名勝多し、生田森、生田川、生田の池等の文字は古來種々の書によりて吾人の眼に映じつゝあり。

敦盛萩

平敦盛の遺子某僧となりて、敦盛の墳墓を吊すべく、此地を過ぎ、生田社に詣り、境内の萩の木蔭に眠りて、父敦盛を夢みし跡なりといふ。

八丁梅

梅花の匂ひずくれて、距離八丁の遠さに薫る故に名づくといふ。

箬の梅 生田神社に詣るもの未だ曾て此梅をたづねざるはなし、梶原景季が一の谷の戦場に於て其箬の上に挿み敵と奮闘したりとて有名なり、元は今の奥平野村に在りしが、後に此神前に移すといふ、薄紅梅なり、幹は腐ちて空洞となり、枝は大半枯れ盡くせしも、なほ僅かの枝をととめて永く源平時代の日本武士の面影を偲ばしむ。

梶原の井 梶原が箬の梅を挿みし時、其妻を此井に移せし山言ひ傳ふれども、箬の梅が昔より此境内には無かりしものとすれば、井戸迄て移すといふこと有りや無しやさりながら頗るの古井にして近年その傍に四季咲の白山茶花を植え、常に花の断ゆること無きが爲め、いひ難き雅趣あり。

辨慶竹 源平の頃武藏坊辨慶が義經の代拜として生田神社に詣りし時、奉納せし竹なりといふ、後人其周圍に玉垣を造り、標石を建て、之を記せり。

諏訪山鏡泉 神戸の北に當りての山續き、枕形の丘陵を認む、其中腹に酒旗の風に翻へり瓦屋根軒を連ぬるを見る、即ち是れなり、神戸停車場を距る十五町といふ山中に諏訪神社あり、これ其名づくる所にして、温泉場は其中腹に在り、神戸に在るを以て遊客の多きこと無数なり。

再度山 諏訪山の後の山にして山麓より山頂まで凡そ十二丁なり、山上に観音堂ありて、如意輪観音を安置す。

金星観側石碑 諏訪山に在り、先年金星の太陽を通過せし際、佛國の天文學者某氏此山に於てこれが觀側を爲す、後ち紀念の爲め其地に石碑を建つ。

布引瀧 山麓より登ること三町にして水聲の響々たるもの雌瀧にして高さ七丈三尺、瀑水は岩角に遮られて勢ひ稍々緩なり、其前に長廊を架して客の觀覽に便にす、傍に茶亭あり、長廊を渡り左曲右折して猶ほ山に躡る二三町にし雄瀧の前に出づ、雄瀧は直下十五丈、水勢急にして箭を射をがるが如し、山下には人家百余軒を並へて整然一市街を爲せり。

布引鏡泉 布引の瀧の西側に在り、近傍の料理屋より客の案内を爲す、明治十八年生田川の上流より鏡泉の湧出するを發見し、浴場を設けたるものなり。

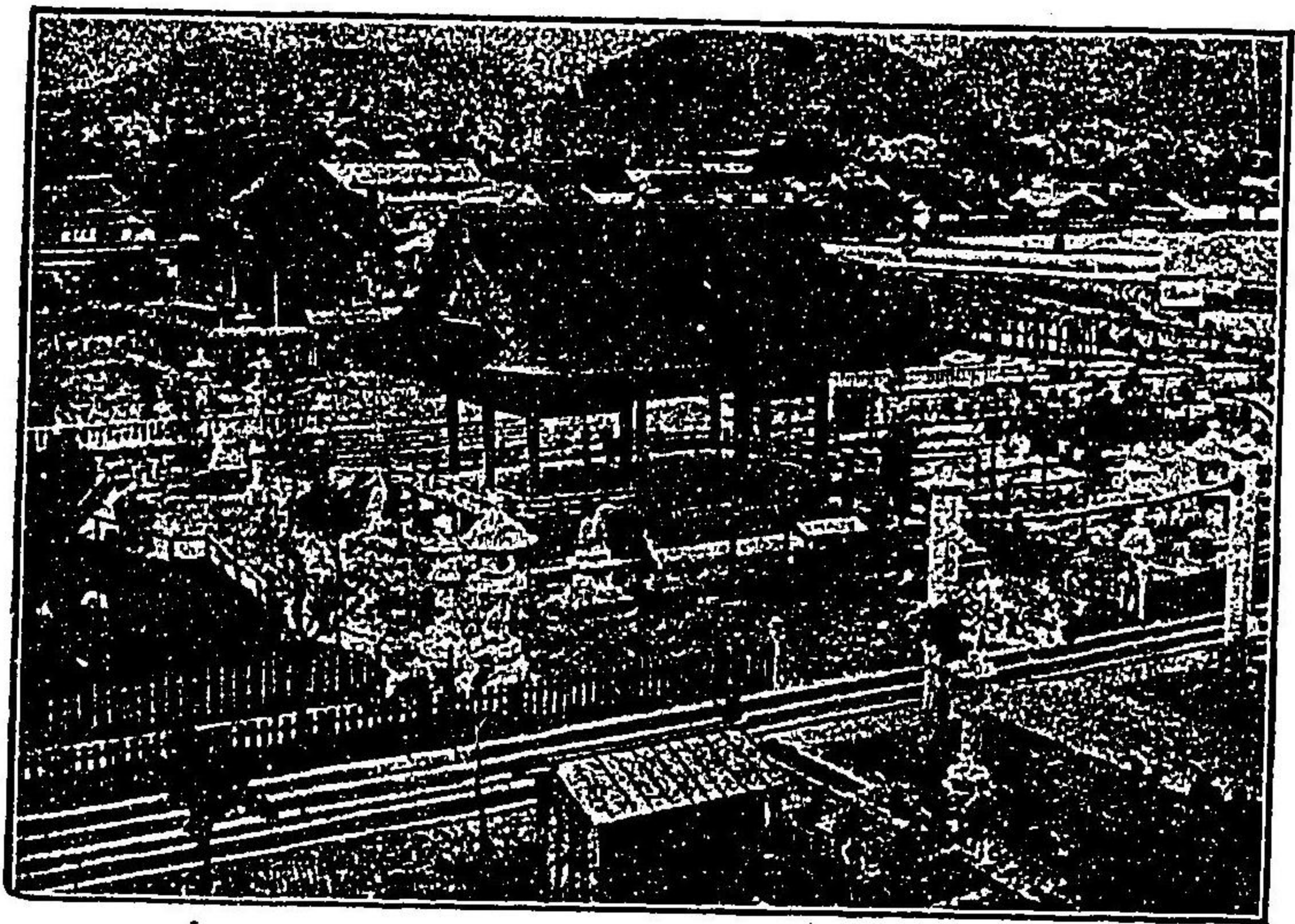
摩耶山 布引山の麓より右折し、字熊内を経て山道を登る一里餘にして、六甲山脈中の峻嶺なり、上野村より登り十八丁にして天上寺に至る、松杉左右に繁茂する嶮道を攀ち、寺に入りて眼界はじめて開く、夏季に至れば内外人の避暑なるもの甚だ多し。

湊川 楠正成戦死の地として人の知る所なり、川の兩岸には松柏鬱茂す、新し橋堤上を遊園の地とす、常に數軒の茶店あり、平日水少なく、河底一面の砂礫にして、霖雨久しき日至らざれば、河水岸を洗ふに至らずといふ。

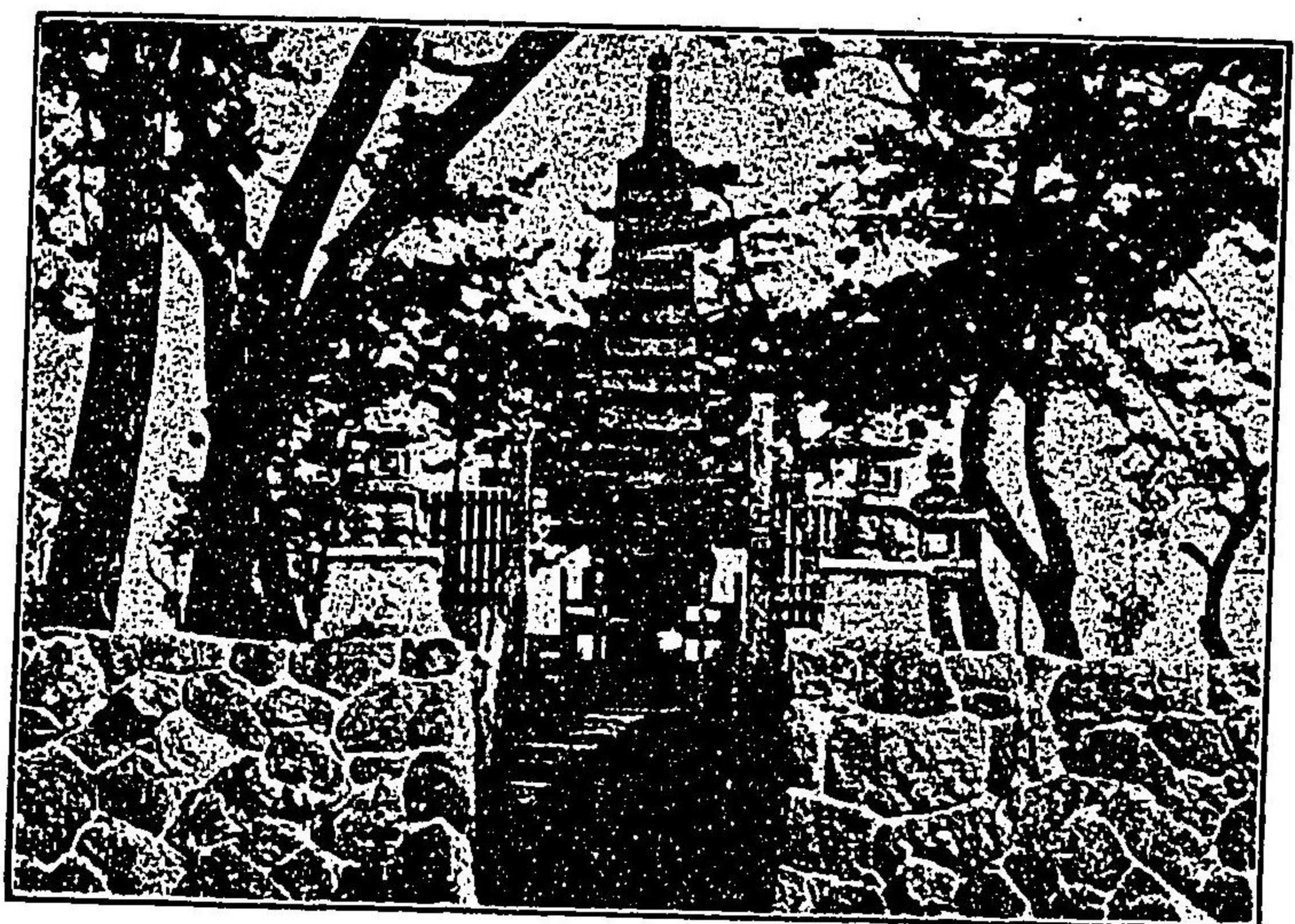
楠寺 本名廣嚴寺、湊川神社の西門を出て、北行すること四町許にして、元亨元年の創造なり、楠正成尊氏の大軍と戦ふて利あらず、一族七十三人と共に此寺にて自殺せり、故に之を楠寺と名づく、一株の古梅、元楠子碑の傍にありしものなるを此寺に移すといふ。

築島寺 本名來迎寺、兵庫島上町に在り、本堂の前に松王人柱の標石あり、傳に曰く、平清盛、此地を埋めて島となさんとす、に海神崇を爲して、工事捗らず、故に人柱を埋めんとして、旅人を捕ふると開き、少年松王なるもの身を海底に埋めて、工事を竣らしむ、里人其死を憐れみ、標石を建つ、即ち此人柱標なり、此地を築島または強島といふ、寺を築島寺と稱するは之が爲めなり。

清盛の塔 兵庫東逆瀬川町眞光寺に在り、十三層の石塔にして、高さ二十六尺、臺石方五尺あり、弘安九年北條貞時の建つる所なり、  
琵琶塚 平家の一門に於て琵琶の名手と聞こえたる皇后亮經正の琵琶塚なり。



楠 公 社



清 盛 塔



と言ひ傳ふ、

和田岬 神戸市兵庫の南端に斗出する砂濱の岬にして、神戸停車場より、凡そ三十町山陽鐵道柳原停車場よりは十四五町隔たり居れり、舊砲臺及び燈臺あり、元弘の役に於て本間孫四郎が鳴鳩を射たりとて有名の地なり、  
和樂園 和田岬の舊砲臺と消毒所との間に一遊園地あり、和樂園と云ふ、數萬坪海濱を圍みて園内に一大生洲を穿ち鯛鯉、鯉等あらゆる魚族を生きながら放養し且つ先年京都に於て勸業博覽會を開設せし際は、此地に水族館を設けしとふ、園の中央に西洋造りの三層樓を築き入口の左に勸商場を設け生洲に沿ひて二三割烹店及び茶亭あり、前面は海を隔て、紀泉の翠黛と相對し、淡路島は手を伸ばして捉へ得べきが如し、

和田神社 和樂園の近傍に在りて境内の幽靜なる、夏日の避暑には屈竟の土地なり、

湊山鑛泉 湊川の上流湊村字奥平野に在り、炭酸冷泉にして之を沸し浴せしむものあり、後山に午頭天王の祠あり、之を天王湯と稱せり、  
神戸に於ける勝地は取り敢えず此の如し、しかれども神戸に於て見るべきものこ

れにて盡きたるか否々大に之あり第一に見る可き神戸港なり次に見るべきもの  
外國人居留地なり次に見るべきもの福原遊廓なり神戸港は常に内外の大艦巨舶  
輻輳し東客西賓朝迎夕送の繁華を極め外國人居留地は歐米各國はいふに及ばず  
支那人印度人等の家を建て族を携へて恰かも自國の感あるが如し福原遊廓は多  
聞通り八丁目の北湊川堤防の東に在り東京の吉原に擬して關西少れに見るの遊  
廓なり芝居は楠公前の大黒座相生町の相生座三の宮神社境内の宮歌舞伎兵庫算  
所町の明治座等なりなほ官市街會社製造所等其建築の壯なるもの其事業の盛な  
るものまた一見の價値充分なりとす而して例によりて神戸附近の名勝を神戸名  
勝に附けて紹介すれば、

住吉神社 神戸より大阪に向ふ線路の第一停車場に住吉驛といふその西隣に  
在り堺の住吉に比すべきにあらねども神さびたる古き社なり

求女塚 大和物語に見えたる二人の男が一人の女に懸想してつひに三人なが  
ら死したるを後の人憐れみて建てたるなり求女塚とて三あり其一は御影町大字  
御影村其二は住吉村の東田圃其三は都賀濱村大字大石村に在るなり  
尼ヶ崎 海岸に沿ふて中國街道の衝に當る繁昌の市街にして神崎停車場より

一里大阪よりは四里二十餘町なり、

秀吉腰掛松 尼ヶ崎寺町に本興寺といふ寺あり城内廣くして其末寺八院なり  
禪宗なり天正年間羽柴秀吉信長の本能寺に弑せらしを聞き引きかへしてこの寺  
に館し此松に腰打掛けて光秀退治の軍議を定めたりと聞く法念上人の袖笠及び  
左甚五郎の蟠龍の彫物あり

伊丹 酒を以て名高き町なり大字大鹿に陸奥の壺の碑に擬したる辻の碑あり  
「距東寺十里距關戸七里距須磨七里距大小路七里」と銘すしかも東寺以下の文字は  
磨滅して讀み難し又天皇町に野の宮祇園あり延喜四年の創始なり久安六年源爲  
朝の修補ありしも天正の頃戦亂の爲めに破壊したり現存の社は貞享二年近衛基  
熙の建築する所をいふ

須磨の浦 神戸より山陽鐵道に乗り込み進行すれば須磨停車場あり此あたり  
を須磨の浦といふ有名なる勝地にして今も猶籬を軒先に掲げ名物の松風村雨磯  
馴味噌を賣る家多し青松白砂前に阿波紀伊和泉の山を望み西南に淡路大島のあ  
るあり晝は白帆漁舟夜は月光漁火風光形容するに言葉なし

須磨寺 西須磨に在り本名福祥寺といふ仁和二年創建なりとかや寶物は望に

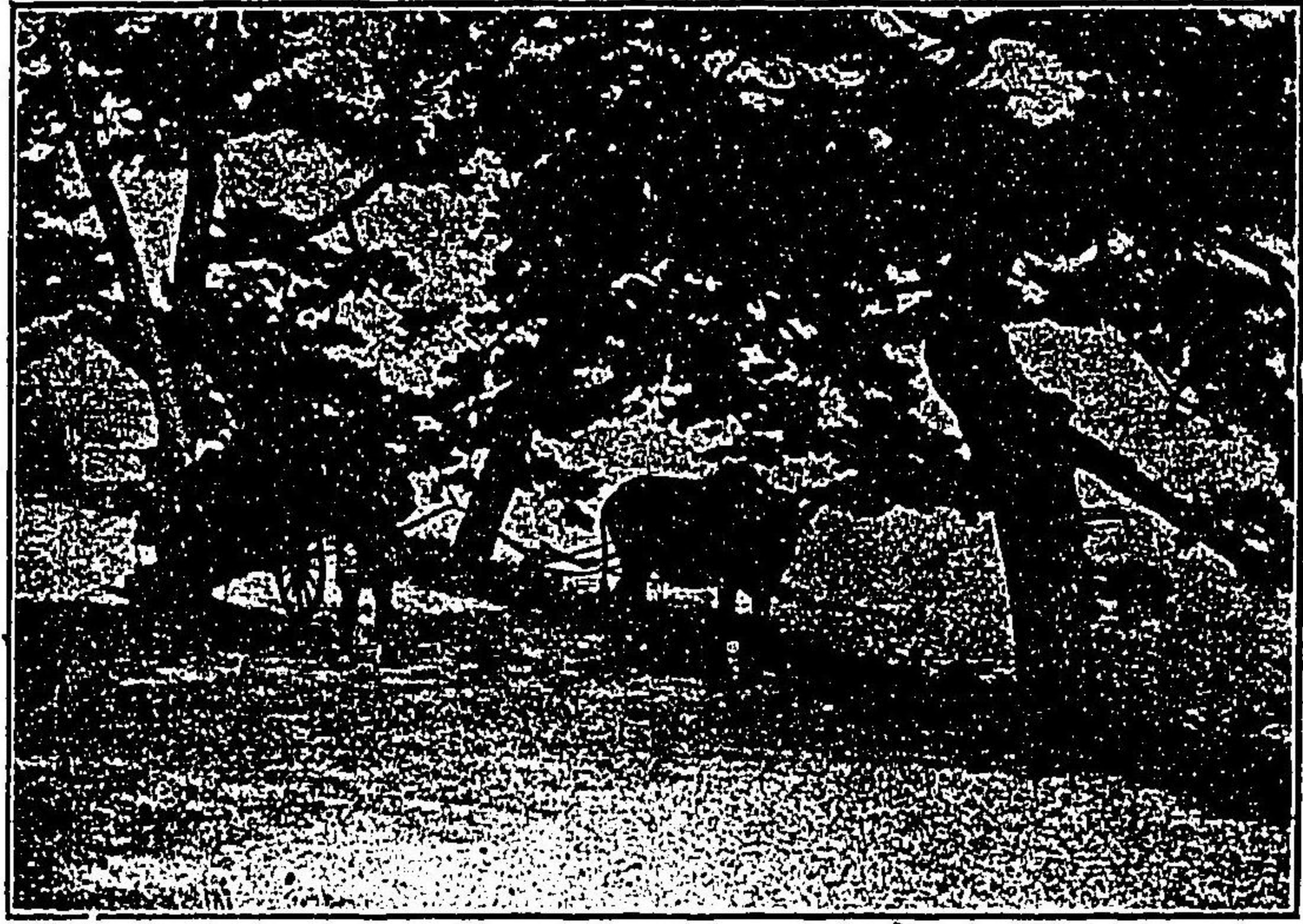
よりて縦覧に供せり、即ち敦盛筆の和歌、短冊、敦盛の畫影、青葉の笛、辨慶筆の若木櫻の制札、即ち『伐一枝可伐一指』の本物

一の谷 平家の居城として人のあまねく知る所なり、鐵拐ヶ峯、鷲越みな其後の山なり、二の谷、三の谷と連続せり、誰か此古戰場に來りて當年を忍ぶの涙を麗くものぞ、

敦盛塚 一の谷の海濱に在り、五重の石塔なり、高サ一丈餘、臺石の廣サ方四尺、今は其臺砂中に埋没せられて、全體を見ること能はず、路傍に一軒の茅舎ありて蕎麥を賣る、是れ有名なる敦盛蕎麥なり、

寶塚鑛泉 これは神戸大阪の間西宮停車場より下りて二里にして至るべし、溫泉場には、温冷の二泉あり、料理屋宿屋等甚だ多し、後に甲山を負ひ眺望佳絶なるを以て夏日は浴客蟻集す、

有馬溫泉 關西第一の溫泉にして、攝津國有馬郡湯屋町に在り、人家凡そ四百五十戸、土地は海面より高さこと一千二百尺なり、大阪よりこゝに赴くは神崎停車場より寶塚鑛泉の在る處を過ぎ行くもよけれど、住吉停車場を下りて六甲山を越へ瀧の川に沿ひて登り、愛宕山の麓に掛るを以て第一の近道と爲す、神代のむかしよ



瀧ノ子舞



磨須

り滾々として湧き出て今に至るまで絶えず、人代となりては欽明天皇を始めとして世々の天皇の此地に行幸ましくしこと屢々なり、明治十六年一たび西洋風の構造と爲せしが先年又改めて、日本造りとし、其様恰かも宮殿に異ならず、住吉停車場より里程僅か三里なれど、山道なるを以て車を通すると能はず、併し乍ら今は阪鶴鐵道のあるあり、三田停車場より僅に一里弱、健脚の人は徒步するも途中風景の奇なるものあるが故に大に心神を慰むるなり、

有馬十二坊 健久二年、仁西上人有馬に來りて温泉場の再興を爲す、大和國吉野より數名の人を連れ來り、薬師如來の十二神將にかたどりて十二坊を建築し、其人をして温泉を守らしめしが、此坊いつとなく旅館となり、數も八軒に減したり、其他通常の旅館二十餘に及ぶ、多くは三階造りにして、宿料は一等七十錢、二等五十錢、余は之に準ず、二十五錢位の所もあり、

有馬の名所 古き土地なれば、名所隨て多く、浴客をして徒然たらしむ、中に就て最も有名なるものを擧げんか、

鼓ヶ瀧 湯山町の南八町、瀧の川の上流に在り、直下一百尺、近傍巨巖突兀として、奇景いふべからず、瀧道の盡る處に有明櫻あり、數十株の山櫻楓樹に交りて、其妍を

撞にせり、有馬六景中に冠たるもの也。

落葉山 城山、童子山、道場山等の別稱あり、湯山町より河を隔て、西の方に峙だつ、山麓には瀧の川の流れを帯び、春夏の交には鶯歌蟬聲を聴くによろしく、秋冬には白雪景を眺むべし。

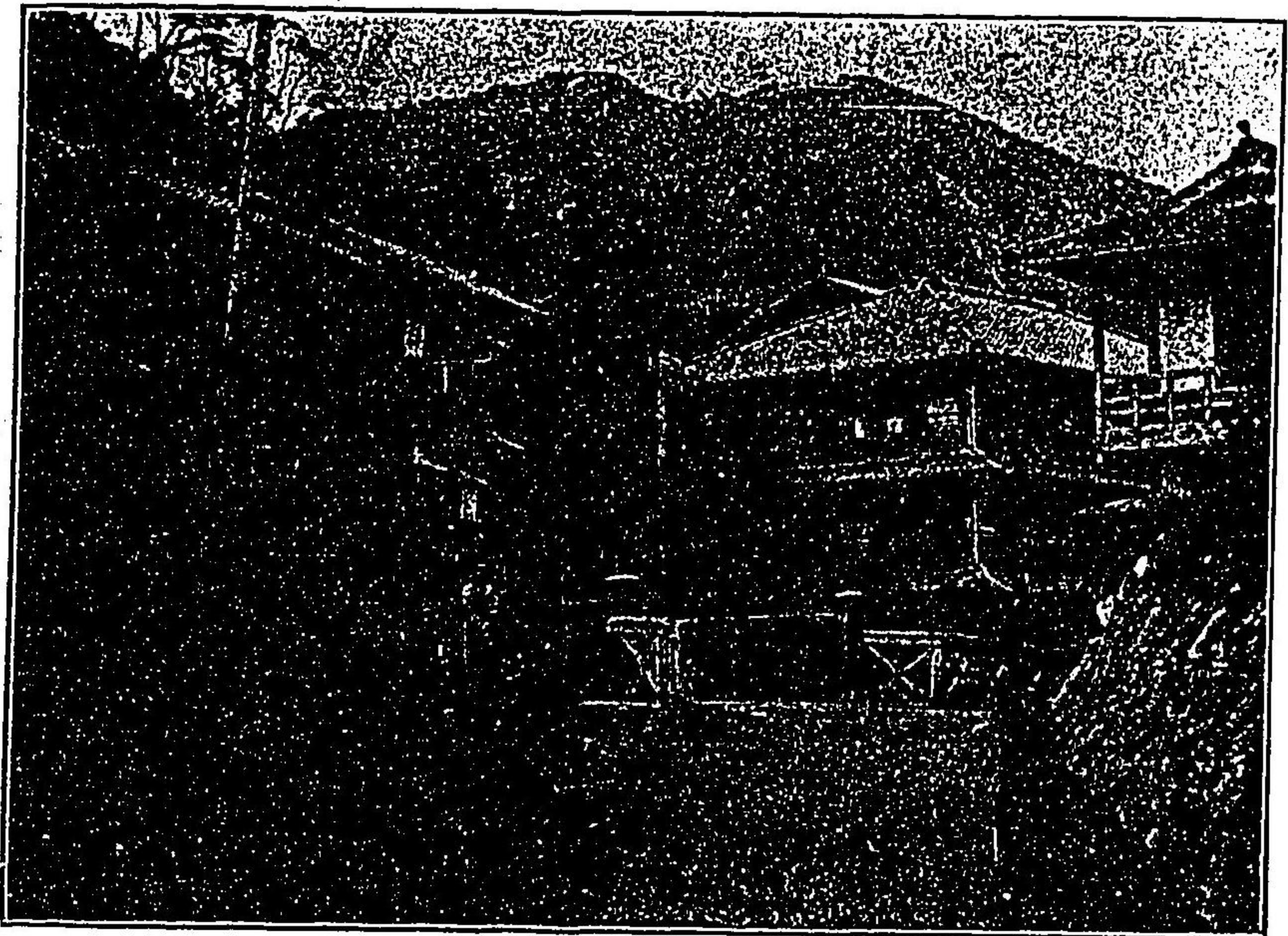
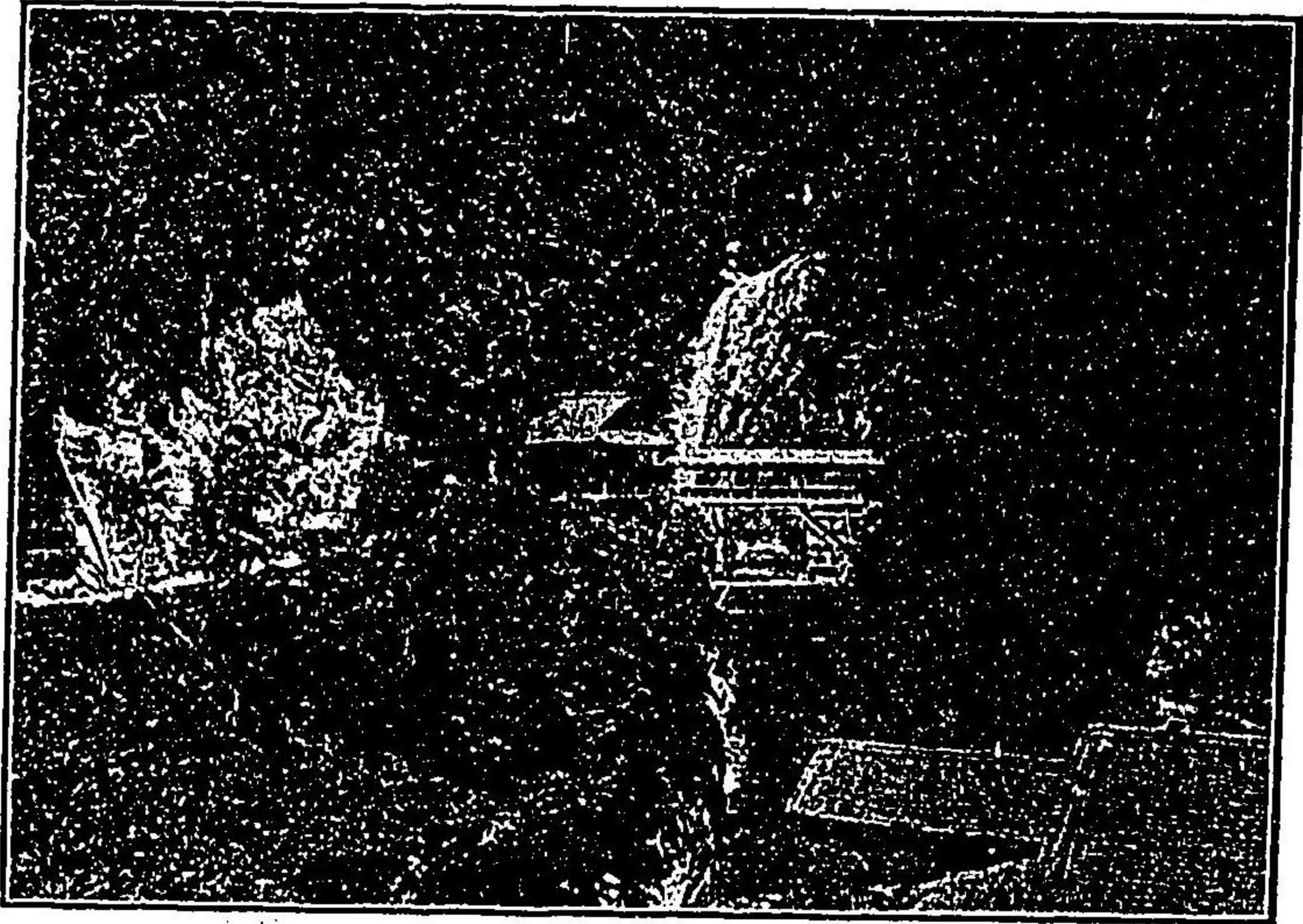
温泉寺 湯山町の續きにして、愛宕山の麓に在り、行基僧正開山にして、仁西上人の再建なり、其後兵火に罹りしを秀吉の正妻北政所建立ありしなり、長一尺の薬師如來及び運慶、湛慶作の十二神將を安す。

有馬の公園 湯山町より巽に方りて最も風景に富める所を功地山といふ、昔時孝徳天皇此温泉に行幸ましまし行宮を營ませられんが爲め、良材を伐採あらせられし舊地といふ。

有馬富士 湯山を去る三里餘の北方にあり、峩々として天表に顯はれ、恰かも富士山に似たる所あり、秋の季より冬にかけて春の初に至るまでは満山雪を戴くが故に一層の眺めあるなり。

有馬六景 飛鳥井雅重の撰みし有馬六景は、鼓瀧の松風、有明櫻の春望、落葉山の夕照、温泉寺の晚鐘、功地山の秋月、有馬富士の雪、是なり。

布引之瀧



有馬温泉

歴史上の人物 神戸及び其附近の歴史上の人物といへば、また堺と同じく聊か此地に關係ありといふ丈けにて、こゝに附着の人物とてあらざれば、其名所なる丈けそれ丈け擧ぐべき人なきなり、強て指を屈せよといへば、福原に都を遷し、天子をこゝに奉じたる平清盛、其後には鶴越の阪落しにて萬夫不當の勇將の名を得たる源義經、龍に梅を指したるが爲めに名高くなりし梶原景季、平家敗北の時に當り陥止まりて勇ましき討死したる平知章、それより後は湊川にて討死し、忠臣の鏡千古にくもりなき楠正成等ならんか。

神戸の詩歌 神戸の詩歌とて擧ぐべきものはあらざれど、其土地に残りたる詩歌を拾はゞ又乏しきにあらざる也、著者、例によりて其二三を擧げんとす、

○

宿生田

千歳恩讎兩不存。風雲長爲吊雄魂。客窓一夜聞松籟。月暗楠公墓畔村。

攝西道中

碧瓦粉壁映暗波。官道乾砂渡淤河。風景依然人欲老。楠公墓下十經過。

一谷

安積良齋

(一八九)

菅茶山

頼山陽

歌成玉樹醉金尊。燕雀安知棟宇燔。飛將忽從天半至。全軍爭向海灣奔。縱橫利刃舟中  
指寂寞寒潮月下魂。郡塢空成百年計。一朝荆杞擁頽垣。

湊川

南枝入夢得真才。闔外何爲混驥駘。國族精忠皆殉國。十年籌略總成灰。丹心常照青天  
日。碧血空留古墓苔。遺恨千秋消不盡。滿川夜雨鬪風雷。

一谷

吉田松陰

敗餘人膽破。一谷更無何。莫道平家辱。未曾向仇和。

楠墓

生逢知己主。國事力難支。嗟臣死而已。死外無可爲。

謁楠公墓

小原鐵心

貞珉赫赫勳功勳。稽顙碑前雙淚紛。叛服無常皆是賊。始終殉國獨觀君。鄂王墓表西湖  
土。蜀相祠堂北嶺雲。一片忠魂消不盡。江山千載有芳芬。

攝西舟中

吾每讀書觀大略。未曾一一問如何。快帆今日須磨浦。目擊幾州山勢過。

○

武庫の海のにはよくあらしいさりするあまの釣船浪の上ゆ見

ゆ 人 磨

たまもかるみぬめをすきて夏草の野鳥か崎に舟ちかつきぬ

人 使 九 人

わさもこに猪名野は見せつ名すき山角の松原いつかしめさむ

黒 人 隆

あはち島はるかに見つるうき雲も須磨の關屋に時雨きにけり

兼 家 昌 隆

あはち島通ふ千鳥の啼く聲にいく夜ねさめぬ須磨の關守

兼 經 昌 衛

わたつみははるけきものをいかにして有馬の山に汐湯出らん

兼 三 位 昌 衛

有馬山いな笹原風吹けはいてそよ人をわすれやはする

三 位 昌 衛

須磨の浦に綱くりおろすうけ舟のうちかたふきて世を歎くか

な 親 房 景 季

らん

昨日までとはんと思ひし津の國の生田の森に秋は來にけり  
月はいま後の山に出てぬらんあらはれそむる須磨のうら浪  
一の谷うち死とけし壯士をおこして旅の道つれにせん

(一九二)

殿子

家隆

景樹

松陰

重頼

同

同

唯雪

同

鬼貫

同

常矩

同

芭蕉

はく息か鐵拐か峯のはる霞  
行平や松風如何にすまの花  
御免なれ兵庫の月に秋の雲  
やくしたに佛や有馬神無月  
こぼる夜は鼓の瀧のぬ河かな  
千鳥啼く須磨の明石の舟にゆられ  
須磨の秋の風のしみたる帆燈か  
明月や酒屋芋賣須磨明石  
蝸牛角ふり分けよ須磨明石  
月はあれと留守のやうなり須磨の夏

なでしこにかゝる涙や楠の露

はし鷹やあともたつぬる智仁勇

あらふるや露に千鳥をすまの牀

松茸に制札はなし寺の入り

冷たしや吹出る風も一の谷

月今宵松にかへたる宿かな

鬼貫や新酒の中の貧に處す

笛の音に波もより來る須磨の秋

御所となる汀やこゝら郭公

北風か二千餘年のむめ青し

去りながら吞までも須磨の浦千鳥

同才丸

同

同

同

蕪村

同

同

野梅

同

大江丸

(一九三)



## 第二章 大阪商業活眼

### ○商業的大阪

大阪は日本の商業地なり、大阪は東洋の商業地なり、今は將に世界の商業地たらんとす、とは三尺の童子と雖も知る所にして、著者が喋々を費やさずと雖何故に其日本の商業地なるか、何故に東洋の商業地なりやと問はるゝに至りては、漠然として答ふる所を知らざる者決して少々ならざるなり、今若し大阪の商業的地理、大阪の商業的歴史、大阪の商業的物貨、大阪の商業的人種、大阪の商業的天候、其他の商業的事をあらゆる方面より觀察し、之を天下に告ぐるものあらんか、日本商業界の爲め、東洋商業界の爲め、而して大阪に向ひ商業の目的を抱きつゝ來るもの、大阪に在りて商業を營みつゝあるもの、其他商業を以て世に立たんとする人に向て幾多の利便、幾多の効果を與へんか、實に知るべからざる者あり、著者固より其器にあらずと雖、敢て實地に見たる大阪より商業的觀察を下し、其一斑に就て云々する所あらんとす。

### ▲大阪の本色

大阪の精神は商業なり、大阪の空氣は商業なり、大阪の政治、大阪の法律、大阪の文學、大阪の教育、大阪の工藝、大阪の美術、すべて商業的傾向を有せざるは無し、之が爲めに自然は大阪に於ける大なる禁物なり、否、商業的大阪は全力を注いで自然の破壊を試みたり、淀川の流茅停の海、皆人力によりて左右せらる、現に爲されつゝある大阪築港の大工事の如きは、最も大なる自然の破壊にして、人間を益し社會を利す、豈天保山、瑞賢山の小規模と日を同ふして語る可けんや、其計畫に曰く、

本計畫は港の全部を内港外港の二區域に分つの組織にして、外港は南北突隄により圍繞せられ、其北突隄は安治川海口の南涯天保山燈臺より西南西六百五十間に當る所を基點とし、殆んど一直線に海に突出し、終端に於て少しく彎形を畫し、水深以下二十八尺の所に達して止む、其延長千四百九十二間なりとす、而して南突隄は天保山燈臺を凡そ南東に距る千五百十間即ち、尻無川燈臺を離る九百三十間の所を基點とし、北西微西の方向に進む事四百二十間にして、更に西微南に轉じて一直線に進行する事千八百五十五間、水深以下二十八尺に到り、少しく彎曲して北突隄に對し、兩者の間水底に於て幅員百間を存し、以て西微南に面し

て港口を作成するものなり、内港は木津川海口の北岸舊砲臺跡の附近に起り、北西微西に進むこと三百三十間、又轉じて北微西に進むこと五百八十間にして、南突隄の基點に達する船渠隄によりて擁護せらるゝものなり、

此の如くにして包圍せられたる水面の内百四十九万坪を新に埋立て、新港市街及各種の用地に供し、且つ其沿岸に於て櫛齒形の凸凹を存し、以て船渠築造に便するものにして、外港に於ける該埋立地の涯端は港口を隔つる實に千七百二十間の長大距離を有す、今港内各水面幅員及面積を擧ぐれば約左の如し、

外 港	幅員	八二〇、乃至 五二五、 <small>間</small>	一〇七、三〇〇 <small>坪</small>	三五七、七
内 港	同	三〇〇、乃至 二五〇、 <small>間</small>	四〇七、〇〇〇	一三五、七
安治川口	同	一一二〇〇、乃至 二〇〇〇、 <small>間</small>	四八、〇〇〇	一六、〇
尻無川口	同	八七〇、乃至 七〇〇、 <small>間</small>	四二、〇〇〇	一四、〇

此他船渠に屬する水面を掲ぐれば左の如し

安治川尻無川間	長	幅	面積
尻無川木津川間	長	幅	面積
	貳百四十間	八十間	五七、六〇〇 <small>坪</small>
	三ヶ所		

長二百四十間	幅八十間	三ヶ所	面積	五七、六〇〇
長貳百四十間	幅百三十間	一ヶ所	面積	二八、八〇〇

安治川北部

長三百五十間	幅八十間	一ヶ所	面積	二八、〇〇〇
--------	------	-----	----	--------

計

一七二、〇〇〇

即ち五七三町

港口より港内に通ずる航路は外港の南方に偏して幅員百間のみを設け、外港に於ける繫船は此航路の北方に集むるものとし、物貨の揚卸は専ら前記の船渠に於ける横棧橋及外港埋立地の涯端に於ける長二百五十間幅九十尺の鐵棧橋を利用するものにして外港は概ね風波の際停船若くは出船準備の用に供するものとす

自然の力にして天然を破壊するもの、豈此の如きことあらんや、然れども大阪が此の如き自然破壊を爲すは、決して今日に始まりたるものにあらず、造幣局の煤烟に櫻宮の風致を害ひし明治の初年に始まりたるにあらず、其淵源や遠し、實に豊太閤が覇を稱したる當時、人工を以て自然を破壊するの一なる難攻不落の大阪城を築

くの大規模を以て、夙に商業地としての大阪は作られたるなり、是れ大阪の本色なり。

### ▲日本商業の中心

名勝としての大阪は名勝要覽之を報じぬ、商業地としての大阪則ち如何、仁徳天皇の御代に於てすでに浪速津の名有りしが如く、實に日本に於ける最も重要なる咽喉なり、殊に貨物の集散より外、目的なき商業地としては最も恰好なる要衝なり、西は九州、中國の大得意を控へ、北は北陸山陰、東は日本商業の原動力に富みたる近江山城の好區に接し、南は大阪商人の出身地ともいふべき大和、河内を有せり、大事の得意なる紀州に連なれり、而して北海道の如きは其大得意の一にして、同地方より年々集り來る貨物は眞に車載斗量するも及ぶ可からず、商業地なる大阪は此輸入を受けて空も動する色を見せず、恰かも強壯なる胃腸が、朝夕凡百の食物を受けて順序よく之を消化排池するが如く、夫れノ四方に散するなり、而して其交易媒介より出でたる利純は残りて、恰かも食物中の滋養分血液となりて全身を養ふが如く、大阪をして倍々盛大商る大阪たらしむるなり、是れ勿論内地商業より見たる大阪にして、之を日本商業の中心と爲す、決して誣言にあらざる也。

### ▲大阪商業の中心

日本商業の中心地たる大阪に於て、更に大阪商業の中心たるものを求むれば如何商業地理上の首府とも稱す可き土地は那邊に在る、堂島か、否らず、天満か、否らず、川口か、否らず、曰く何、總稱して船場と名づくる土地即ち是なり、他より寄り集まる物貨が川口の關門をくぐりて入り来るや、必らず船場を指すなり、幾日時を此處に滞留して或は大坂人士の招聘に應じ、或は更に地方に派遣せらる、物貨の集まる處、人また集る、大阪の銀座街たる高麗橋通は、此船場に屬するなり、高麗橋西より西横堀に至る繁華の街路、商賈軒を並べ、店舗の構造最も注意の痕あるを見る、三井銀行、三井物産會社、三井吳服店、百三十三銀行、三十四銀行等此街路に於て商業上最も注目すべきものたり、また此地(船場)の東北端より大河を前に旗亭旅舎頗る多きもの之を北濱、大川町、築地等となす、北濱には株式取引所有り、株式仲買店軒を並べ、投機の客群衆す、又内北濱、今橋等には北濱銀行の巍々たるあり、鴻池善右衛門氏の邸宅、鴻池銀行、日本生命保險會社、住友吉左衛門氏本店、住友銀行等の壯觀あり、淀屋橋筋、心齋橋筋、堺筋いづれも商賈軒を連ねて以て其業を勵む、其他内國諸方より集散する物貨に對し、所謂大問屋なるもの有りて之が取扱を掌る、彼有名なる田中市衛氏の如

き實に此船場の、一間屋より出てたるものなりと云ふ、其他金澤仁兵衛氏の如き、亦た問屋として古へよりの名家なり、決して一代身所にあらざる也、一方には中の島を隔て、堂島に連なり、一方には天満と接し、一方には靱あり、一方には島の内あり、道頓堀遠きにあらず、船場の四方は此の如くいづれも好震區によりて圍まれたるなり、而して其靱、天満、堂島等が商業地として各特色を有するものなるは勿論、島の内道頓堀等の一種の遊樂地がこれに接したる、亦た以て船場が商業地理上の首府たるを證するものと云ふ可きなり

### ▲物價集散の中心

此の如くにして船場を大阪に於ける商業地理上の首府たらしむる原因、すなはち其商品四方より集散するものには何々ありや、最も遠き北海道よりは肥料、海産物等を輸入し、九州よりは石炭、米穀、蠟、鯉節、砂糖、織物、青苳、煙草等を輸入し、中國よりは麵類、木綿、綿花等を輸入し、四國よりは紙、砂糖、鹽、海産物等を輸入し、京都より織物を輸入し、大和河内亦た織物なり、江州よりは麻、蚊帳等を輸入し、岐阜よりは紙を輸入す、紀州よりは材木、塗物、ネル織物、種油、蠟等にして、近き土地よりは播州より、鹽、米穀、麵類、丹波より、眞綿、生絲、砥石、讃岐より、鹽、小豆、島より、醬油、但馬より、柳籠、其他彼清

酒の如きは伊丹池田より堺より最も輸入の便ありて大阪特産の一に數へらるゝ迄なるは天下の知る所なり北陸諸國が大阪に於ける供給地なるも亦た天下の知る所二つながら此に費せず其他小さき部類を分爲したらんには一々數ふるに違あらざるなり如上の貨物はいづれも船場に向て集中し來り米に於ける堂島海産物に於ける靱材木に於ける長堀等は別論として而して散せらるゝの日を待つなり

▲韓清貿易

この商業品の散する所は果して大阪人士の需要に應ずるに止まるか内國各縣に供給するに止まるか否々然らず及ぼして海外貿易の料となるなりしかも歐州諸國との貿易に至りては神戸之を掌どり曾て大阪に待つ所なし獨り支那に對する朝鮮に對する所謂清韓貿易なるものに至りては大阪が特殊の商業的歴史を有するが爲めに決して他の海外貿易地に行はゝものに比すべくもあらざる盛大を呈せり遠き浪速津の昔し朝鮮より輸入せしものゝ上陸地など古き考證は茲に要なし足利の末造に於て日本に於ける對支那(即ち明國)對朝鮮の互市場は筑前博多と和泉の堺との二ありしのみ博多は大内氏の勘合印を用ひて之を保護獎勵し堺は將軍家管領直々の保護獎勵を蒙り海外貿易場としては實に日本第一の要區な

りしなり豊臣氏天下の權を握るに及び堺の繁華を割いて之を大阪に移し所謂自然破壊の工事を爲して竟に大阪をして當時天下第一の要津たらしむこの時に於て支那朝鮮との貿易も亦た移りて大阪に至れり爾來二國は大阪の大得意客となり斯内國各地より集る物品にして海産物織物其他乾物類の二國に向て輸出せらるゝは年々非常の多額なり神戸互市場となりて以來と雖此二國のみは大阪に於て其商業取引を爲すを常とすたとへ神戸より陸上げ積入れを爲すとても眞の取引は大阪に於て行はるゝものと知るべし故に外國貿易は商工業の中心たるに似ずして極めて少額即ち去廿八年以來卅三年迄の統計を舉れば

年	輸 出	輸 入
明治廿八年	一、一三四、七〇〇圓	二、六二一、二六一圓
同 廿九年	一、一四一、三二六圓	四、二一三、七一九圓
同 三十年	二、三四二、四三七圓	四、四二四、七四二圓
同 卅一年	三、一六五、〇八二圓	三、五五五、九三七圓
同 卅二年	六、二四四、二九九圓	六、四〇五、〇九一圓
同 卅三年	九、六二六、五九五圓	九、七四一、四三六圓

の加く少額なるに拘はらず、輸出品仕向地として明治三十三年の統計は、

支那	一、一〇五、二五七圓	香港	二九三、三〇八圓
韓國	七、四六二、六一〇圓	英領印度	一五三、二一〇圓
露領亞細亞	五七六、二七六圓	佛領印度	三六四
暹羅	一三、九七五圓	英吉利	一六、六四二圓
獨逸	三、八三三圓		

を示し、輸入品の産地は、同年の統計

支那	一、〇八七、六〇〇圓	韓國	五、〇二六、一八三圓
英領印度	二〇、六八〇圓	露領細亞	三、六三四圓
比律賓諸島	八九、五七八圓	英吉利	五七八、九四七圓
獨逸	一五六、〇八四圓	佛蘭西	三九、九四〇圓
瑞西	一九、八二〇圓	澳大利	一、八三三圓
和蘭	六八九圓	露西亞	二九二圓

を示す、知るべし其主たるもの支那に在り、また朝鮮に在るを、是れ著者が大阪を以て日本の商業地と爲し、東洋の商業地と爲す所以なり、而して築港成就の曉は或は

神戸繁華の半を奪ひ來りて、進んで世界の商業地たるに至るや、亦た知る可からざるなり、

### ▲商品の特在地

大阪には一種の特色あり、四方よりするの貨物は悉く其商業地理の中心たる船場に集中するに拘はらず、其主たる集散實行は船場を圍繞するの繁昌地に於てせらるゝことなり、米は堂島申すに及ばず、海産物は靱、干物は天満、藥種は道修町、小間物は順慶町、久寶寺町、材木は長堀、廢物は御堂筋、是れ大阪通の商人が常に口にするとす、しかもヤハリ其半以上は船場を離れずして堂島、靱といへども近接したる土地なれば、依然船場を以て大阪貨物集散の中心と斷言するも、さまで不都合にはあらざるなり、

### ▲内國商業的統計

著者は外國貿易の現況を統計表に示せり、讀者は必ずや内地商業の現況を陳ぶるに、上記の概括記事のみにては未だ満足せざるべし、著者は之を補ふべく、こゝに内地商業の統計を掲げん、讀者希くは前上概括の記事と參看して以て得る所あれ、先づ明治三十三年の統計により始めん、一ヶ年中に大阪市より輸出する貨物の價貳

億參千萬圓、同輸入貳億五千四百萬圓に達し、人口九十二萬とすれば一人の商賈高五百參拾七圓に當れり、其商品の中輸出又は輸入の價五拾萬圓以上に上るもの七拾六種あり、其中更に最重要なるものを擧ぐれば

	輸 出	輸 入
米	三、三〇六、七〇一	一、一、三八三、八六六
砂糖	五、九六七、六六三	一、二、三八七、八五二
茶	二、〇四四、二四五	二、八三五、一六〇
大豆	九〇〇、〇一七	三、四八二、九三九
乾魚	二、〇〇二、七八三	四、三八二、五六八
和酒	六、〇六〇、六四二	四、五〇五、五〇八
小間物	二、九〇五、二六五	一、二七七、七〇五
陶磁器	一、一二一、〇七〇	四、四八二、四七一
硝子器	三、七九三、二一八	一、一三三、二八〇
銅	二〇、五一七、七九二	八、一七九、〇七〇
鐵製機類	五、八三〇、一七五	一、六一〇、六〇〇

葉 莖	五、一七三、五八八	七、一二三、二五八
線 綿	六、八八八、三二〇	二、八六一、八三五〇
綿 糸	二、二五八、八〇〇	一、二、六四五、一二〇
綿織物	三、四〇一、七五二〇	三、一、一九八、六八四
絹織物	八、二四七、四五六	一〇、一七四、六四〇
毛織物	六、〇四六、八〇〇	七、三四〇、九六〇
各種藥品	五、五六二、五八五	三、四七一、九二五
和 紙	一、九九〇、五六〇	二、三三七、七五〇
木 材	一、〇四三、二七六	三、七七五、九八四
雜 貨	二、一八六、八三六八	一、二、四八五、九四四

▲倉庫及市況

而して前記貨物に對して設備されたる倉庫を擧げんか、七會社の主管せる庫數約九百其總積數七萬四千貳百十四立方坪にして、重なる取引所は米穀取引所、株式取引所、三品(絲、綿、木綿)取引所、油取引所、砂糖取引所等あり、卅三年中に於ける各所の賣

買出來高を擧ぐれば左の如し

開市日數	買買出來高	金	額
米 穀	二七七	八、九一〇、三三〇石	九七、〇九六、一三五
株 式	二八五	五、〇九七、七一〇枚	二三一、五四七、一四二
綿 糸	二八一	二、二〇九、六四五捆	二一四、四五四、〇八一
油	二九二		五、〇九一、〇七九
砂 糖	二八六	一、三九八、一六〇〇斤	八四七、二〇四

何ぞ其盛なる而して更に其重なる取引所に就て一二を説明せしめよ

▲株式取引所

大阪商業の中心たる船場に於て、東區北濱二丁目に在る最も宏壯なる建物は株式取引所なり、本所の創立は明治十一年に在り、發起人は五代友厚、鴻池善右衛門、住友吉左衛門、三井元之助、加納治郎右衛門、熊谷辰太郎、井上新三郎、山口吉郎兵衛、笠野榮吉、平瀬龜之助の十氏にて、當時の資本金貳拾万圓、營業年限五ヶ年なりしが、其後追々願繼ぎを爲して營業を繼續し、且つ資本金をも數度に増加し、去廿九年以來は六拾万圓の會社組織なり、仲買人四十六名立會時間は休日の外、日の長短により、午前

九時又は九時半より午後二時までにて、立會の模様は何人も縦覽するを得べし、諸株高低の著しき時、仲買人の商戰に鏑を削る有様亦一場の奇觀とす、

▲三品取引所

是れ亦た船場に屬する東區北久太郎町三丁目に在り、三品とは内國産の綿絲、綿花、木綿をいふ、明治二十七年はじめて賣買を開始す、當時の資本金十五万圓創業の際には賣買商品皆各生産地名又は製造所名を以て銘柄を區別したるより、賣買銘柄の範圍狭小に失し、買占の弊害起り易かりしが、二拾七年八月營業細則を改め、綿糸は各番手毎に品質の等級を定め、同番手にして品位の等しきものは、製造所の何れを問はず、賣買受渡に共用すること、せし以來、大に取引上の發達を來せり、尙賣買の發達と受渡品の増加に伴ひ、當初より行ひ來れる肉眼的検査にては、兎角受渡の圓滑を缺くことあるを以て、三拾二年十月詳細なる検査標準を設けて、器械的検査を行ふことに改め、不合格品あるときは製造者に直接注意を加へ、各製造者も大に原料棉花并に紡績に注意するに至りしかば、糸質一般に良好となり、取引所の信用も亦加はり來りしが、概して賣買商品の趨勢を觀るに、創業當時に注りては支那棉花、伊豫木綿の賣買非常に盛なりしが、近時は内國産綿糸就中左熱甘手の賣買最も盛



にして、外國産棉花、内國産白木綿之に次ぎ、尙將來需用供給共に増加すべき趨勢ありと、今は三十万圓の資本金を有するに至れり、仲買人は二十五名といふ、

#### ▲堂島米穀取引所

船場を以て大阪商業地理上の首府東京に比せば、堂島は大阪商業地理上の副首府京都とも譬へつべし、

大阪の商業地といへば先づ堂島の名を聯想せざるは無し、而して只だ一箇の米穀取引所を有するのみにて、敢て商業地理上の位揚を船場と争はんとするに見ても如何に其米穀取引所なるものが、其重きを大阪に置かれつゝあるを知るべし、蓋し米穀は日本國民生命の母なり、英雄も美人も之を欠げば其英雄たり美人たる資格を失ふ、豊太閤が大阪に城くの時已に糧食としての米穀を城下に集るの必要を感じ、此際山城國八幡在に三郎左衛門といふ機敏の人あり、天正年間巨資を提げて大阪に來り、今の淀屋橋南詰に淀屋と號する商店を構へ、豊臣家に軍糧を納め又藏を建て、米穀を賣買す、其門前に市を立つ、後遂に一の米穀市場を形作るに至れり、豊臣氏亡ひて徳川氏の世となるや、其子孫淀屋辰五郎奢侈のため闕處の身となり、其宅前の市場を堂島に移せり、これ乃堂島の權輿なり、而して舊幕時代諸藩の藏屋

敷ありて、其留守役は積來れる米穀の賣方となり、出入商人中の重立てるもの藏元となり、藏元の下に米問屋あり、仲買人ありて、仲買人賣買の仲立をなし、以て各種産米格附の便法とせしが、維新後明治二年に至り、當業者限月米賣買の法を講究し、同三年許可を得て開業し、九年に米商會所と改まり、後廿六年取引所條例發布ありしより更に改めて營業を繼續しつゝ、今日に及べるなり、當取引所の地區は大阪全体にして、攝津中米を標準とし、直取引、延取引、定期取引の三種を取扱ひ、日曜大祭日、祝日、天滿天神祭、臨時休業の外、毎日午前(本場)は二時卅分間、午后は(后場)一時卅分間、尙夏季は夕場と稱して、一時間以内、仲買人市場に立合ひて、其日の公定相場を確定す、この市場は西は馬關、東は東京に至る各要處の取引所と交互關聯し、時々刻々電信電話を利用して互に通報し、價格の平均を取りつゝあり、開市の際には市場の内外人を以て充ざる仲買店は東大江橋より西渡邊橋の間に軒を列ね、三十四あり、寄場は其中程にあり、蓋し曾て大坂城軍糧の爲めなる米市場は今や日本人の食料の爲めの米市場となれり、東京、大阪、桑名、馬關四大米市場中第一位に居る、宜なるかな、

#### ○大阪商品陳列所

此堂島に於て、米市場と相並びて商業地理上の位置を高めつゝある者は、大阪商品

陳列所なり、明治二十三年府の勸業委託金を以て經營の基礎とし、市内の重立ちたる商工業者の賛成を得て設立したるものにして、其目的は商工業の擴張改良を圖るに在り、内外國の重要物産を陳列し、又これに關する新聞雜誌圖書等を蒐集して實業者の参考に供し、兼て、商工業上に必要なる諸般の調査及試験を行ふをもつて事業とす、其内部の區劃は先づ内外商品部、調査部、圖書部、工業試験部の四部に分ち、物品の陳列は農産、水産、工産、林産、礦産の種別により陳列品には番號、品名、購得の場所、年、月、産地及製造元、品質、品位、用法、寸方、價格、割引、輸出入關稅額、輸入元或は輸出先地名、毎年需要高、注意の十五項を詳細に記載せる説明書を附し、尙又事務所には陳列品毎に毎年の製造高、重なる需要地名、重なる輸出入商店、需要の季節及流行の變化、需要者の嗜好、改良を要する點、其他須知の事項の七個條を記したる説明書を備へ、當事者の参考に供す、調査部には外國文章の編纂、翻譯、内外商工業の調査及び報告書の編纂發行、商品見本の説明等を爲し、圖書部には商工業上緊要なる新聞雜誌圖書を備へ置き、來館者の縦覽に供し、工業試験部には廣く工業上の諮問に應じ兼て化學的商品及び礦物等分析試験の依頼に應ず、而して陳列所は毎月一回報告書を發行し、内外商品部陳列品の解説貿易上參考となるべき事項、商工業に關する

説明等を掲載して世に發賣す、陳列品を當業者に貸與し、又は分與するの法をも設けて實業者の便利を圖れり、現今同館内に陳列する外國物品は米、佛、英、清、朝鮮、露西亞、呂宋、新嘉坡、加奈陀、濠洲、布哇、獨逸、白耳義、奧太利、瑞典、諾威、和蘭、土耳其、シヤフ等の物産數百種にして、其選擇の方計は輸出入品の參考となるべきもの、殊に外國生産物にして現在我輸出品に競争し、若くは將來競争を來さんとする傾向あるもの及び外國市場に於て他國の輸入供給に係るもの、内、本邦において生産輸出し得べき見込あるもの、又は専ら外國より我國へ輸入を要する物品類の製造原料、半製品、精製品、及び製造器械の雛形等を廣く衆人を示すに在り、而して内國品は製造の原料及半製品を主として陳列せり、東京の農商務省陳列所に比すれば、其商業者の參考となる點に於て、遙かに勝れり、東洋の商業地たる大阪に設置せられしものたるに耻ぢず、

#### ▲興信所と會議所

其他大阪に於ける商業的文明の設備として見るべきものは船場の商業興信所と堂島の商業會議所と、第一に指を屈すべきか、商業興信所は船場北濱三丁目に在り我國に於ける興信所の最初にして、今より十年昔、恰も歐米漫遊を終へて歸朝せし

外山脩造氏、彼地に於て見聞せし興信所の我國に必用なるを感じ、先づ自己の管理せる大阪貯蓄銀行及其他の三國立銀行と協議を定め、更に廿四年七月を以て、當市内の重なる銀行業者と協議する所ありしも、事新奇なるが爲異議者多かりしが、日本銀行の賛成を得たるより發起人は勢を得て、遂に申合規則なるものを議定し、外山氏自ら所長に任じて、廿五年四月に至り、西區土佐堀一丁目に創立事務所を設け、獨逸の「シンメルフェング」と稱する興信所の主義を模倣して専ら加入者に對する審問回報を勉むることゝしたるが、爾後種々の變遷を経て次第に發達し、今や本所の外、神戸、京都、名古屋、門司の各地に支所を置き、東京興信所と連絡を通じ、尙米國の「ブラッド、ストリート」[譯]、獨逸の「シンメルフェング」、佛國の「コンテンチア、イズ、リヨナチ」[譯]、英國の「セード」等各興信所とも連絡をなして加盟者の審問に對する回報をなし、週報、號外、報告及日報を發して銀行會社、箇人、營業者等の異動、其他時々起れる商業上の波瀾を速報す、加盟者の等級を分つて三等とし、出金の多寡に應じて區別あり、又特に希望の向には英文を以て回報をなすことゝせるより、在留外人の加盟もありて、昨年末には六百十七人となり、之を十五年末に比すれば約廿倍の多きに達せり、商業會議所は明治十一年五代友厚、中野梧一、藤田傳三郎、廣瀬幸平

の首唱せしもの今日に至りしものにして、是れ亦た全國商業會議所の嚆矢なり、全國商業會議所の規程の大なるものとして、普ねく人の知る所なれば、こゝに喋々を費さざるなり、

### ▲大阪の銀行

著者は前に大阪に於ける經濟機關たる銀行の多くは船場に在るを云へり、今やこの銀行が大阪商業界に於て如何に利用されつゝあるかの一斑を擧げん、明治三十三年の統計によれば、大阪市中に於ける銀行數、資本金

社 數	資本總額	同拂込	積立金
農工銀行	五〇〇、〇〇〇	二五二、〇一五	五、〇〇〇
株式	二九二、四八〇、〇〇〇	一五、六三六、〇六三	一、六〇六、九五九
普通	九二、〇〇〇、〇〇〇	一、九六二、五〇〇	五二二、九三六
銀行	三、一三〇、〇〇〇	一、三〇〇、〇〇〇	三〇〇、五〇〇
合 名	一一、三七四、〇〇〇	三、七四〇、〇〇〇	一、四四四、一〇〇
個 人	七、七九〇、〇〇〇	二、八七五、〇〇〇	二七八、二〇〇
貯 蓄	六〇、三三三、一三〇、〇〇〇	一三、一七七、〇七八	四、一五七、六九五
合 計			

此他市内に日本銀行の支店一ヶ所、其他の銀行の支店及出張店三十五個所、貯蓄銀行の支店二個所あり、此諸銀行の業務とする金融を種別して同しく三十三年の統計を擧ぐれば

預金	貸金	割引手形	代金取立手形	荷爲替	爲替
一年末現在	一年末現在	他當所	他當所	取貸	受振
一、一九〇、三〇三、八四二圓	四六四、一九二、七〇七圓	五〇、〇七五、六五五圓	六八、一八七、二三八圓	一三、一三七、三七五圓	一六七、五七八、九一〇圓
六一、一八一、三二五圓	二八、六八八、一四八圓	二六、三三八、四九五圓	二二、七〇五、三五七圓	二〇、二二七、一九〇圓	二八一、四四六、四五九圓

の如し、而して其資本金五十萬圓以上の銀行を數ふれば大阪農工銀行(西區立賣堀北通第五十八銀行)(西區北堀江町五丁目)大阪實業銀行(西區新町南通)大和銀行(南區長堀橋筋一丁目)浪速銀行(東區淡路町二丁目)三十四銀行(東區高麗橋四丁目)百三十三銀行(高麗橋三丁目)大阪三商銀行(東區北久太郎町三丁目)近江銀行(東區備後町三丁目)積善同盟銀行(東區今橋四丁目)北濱銀行(東區北濱二丁目)日本貯金銀行(東區淡路町四丁目)藤本銀行(東區横堀一丁目)鴻池銀行(東區今橋二丁目)山口銀行(東區唐物町

二丁目)岡橋銀行(東區内平野町二丁目)住友銀行(東區今橋四丁目)にしてこれは何れも大阪に本店を有する銀行なり、此外東京に本店を有する大銀行にして大阪に支店を有するは日本銀行(北區中之島二丁目)三井銀行(東區高麗橋二丁目)第一銀行(東區高麗橋三丁目)第三銀行(東區本町三丁目)帝國商業銀行(東區今橋五丁目)三菱銀行(北區中之島)等を數ふべし、而して大阪銀行集會所は明治三十年十一月に創始せられ船場今橋三丁目に在り、主として銀行に關する諸問題を討議研究して之れが意見を其筋に開陳し、又は世上に發表し、或は同業者の打合を爲して親睦を謀り、兼ねて又銀行通信録を發兌して銀行業に關する事項を周知せしむるに在り、現在加盟の銀行は浪速、三十四、百三十、山口、第一、第三、住友、鴻池、三菱、三井、帝國商業、北濱、五十八、二十二、二十三、二十九、七十八、八十九、百四十七、近江、大阪實業、大阪三商、木原、川上、加島、谷村、虎屋、藤本、清水、富岡、大和、積善同盟、尾州、大阪貯蓄、日本貯金、起業、土佐、高知、阿波商業、日本貿易、大和田、大阪工商、岡橋、天滿、旭、西六、津山、青莚、宇和島の五十二行にして創立以來組合銀行の毎半期末現在の行數預金及貸出高は左の如し

年 度	行 數	總 預 金 高	總 貸 出 高
三十一年六月	六九	三三、二七〇、六七三	五四、三三〇、一三六

三十一年十二月	六六	三九、五五一、九八七	六〇、三五二、七六〇
三十二年六月	六〇	五二、六九六、八三五	七三、七一二、四八八
三十二年十二月	六〇	五四、〇九九、八五四	八五、六八八、九一八
三十三年六月	五九	五七、五七四、三六〇	八八、五六三、七三六
三十三年十二月	五七	五九、四四八、〇〇八	八八、二八一、九八七
三十四年六月	六四	五九、三八七、五三七	八〇、五三七、五二〇
三十四年十二月	五九	六一、八二七、六〇〇	七三、五五三、〇二〇
三十五年六月	五四	六八、〇九四、六六七	八二、九五三、〇三六

而して大阪手形交換所は日本銀行支店内に在り、

### ○工業的大阪

商業と工業とは、車の兩輪の如し、商業の盛なる地、工業の隨て興るは、材料の需要は、製品の販賣に大なる便利あるが爲めなり、工業の盛なる地、商業の隨て興るは、材料の供給、製品の運轉に無かるへからざる必要あるが爲めなり、而して之を證據立つるものは大阪なり、嗚呼大阪は大なる商業地なると同時に、また大なる工業地なり、特に近年に至ては外國貿易の進歩と内國市場の需用増大するにつれ、次第に工業

の盛大を致し、手工は變じて機械工業となり、個人の産業は化して工場組織となり、烟突林立煤烟空に漲り、民の寇の賑ひ全國に冠たるは遠望尙よくこれを想像すべし市の統計によれば、大阪における重要工産物の品種及執業人員左の如し、

製綿、木綿紡績、織物、莫大小、モスリン、友仙、手拭地、製煉、鐵製品、金屬製品、鋳力細工、硝子器、陶磁器、坩堝、煉瓦、石灰、セメント、コルクス、製藥、硫曹肥料、製油、石鹼、晒蠟、蠟燭、燐寸、製紙、清酒、醬油、粉類、菓子類、製造昆布、製氷、賣藥、煙草、帽子、肌衣類、袋物類、合羽、卸、化粧品、花簪、洋傘、靴、履物類、扇子、指物類、漆器、時計、樂器、鞆、刷毛類、文具類、算盤、籠、挽物類、竹細工、籐細工、棕梠細工、柳行李、提燈、團扇、傘、帳簿類、印刷物、度量衡器、漁具、紡績用木管、綿打、車輻、船舶、薰物、紙箱、玩具品

執業人員男二万八千四百八十六人、女一万八千九百十四人、一年の製産額五千万圓以上、に及ぶといふ、右の内一年の産額五十万圓以上に上るもの、品種産額及價格實に左の如しとなり、

木綿紡績	五、九七五、七三五貫	一四、三九二、六一〇圓
金屬精煉		六、〇四〇、四六七圓
モスリン	三一〇、一六三反	三、二八七、四三九圓
友仙		

織物	二二九一〇五八圓
製藥	二〇七八一四九圓
鐵製品	一八九〇七一二圓
金屬製品	一四一五九一〇圓
製油	一、一六八、六二四圓
印刷物	一、一三一、九七四圓
洋傘	一、〇九五、三二五圓
清酒	一、〇七一、七六〇圓
製綿	一、〇六〇、五五一圓
手拭地	九八九、〇四〇圓
製革	九八一、九二五圓
肌着類	八二五、〇八三圓
船舶	七二五、三七五圓
製紙	七四〇、二二五圓
硫曹肥料	七二五、八三三圓

(三三〇)

硝子 七〇二、九四〇圓  
 セメント 五五七、三九〇圓  
 石 鹼 五三〇、三二二圓

明治三十三年の統計によれば市中に於ける重なる工場數百八十にして其強力の機關を有し又は多數の職工を使用する諸工場を舉れば大阪鐵工所(安治川北通四丁目) 大阪アルカリ株式會社(湊屋町) 大阪硫曹株式會社(西野下之町) 金巾製織株式會社(四貫島町) 大阪紡績株式會社(三軒屋) 大阪セメント株式會社(木屋町大坂瀛車製造合資會社(島屋町) 木本鐵工場(難波櫻川四丁目) 日本黃銅株式會社(同大倉組皮革製造所(船出町) 大阪造船株式會社(木津川町三丁目) 新田帶革製造所(難波久保吉町) 攝津紡績株式會社(木津川町二丁目) 大阪毎日新聞社(大川町) 三平株式會社(梅田町) 三菱會社大阪製煉所(新川崎町) 濱谷帽子會社(天滿橋筋六丁目) 木原硝子製造工場(興力町一丁目) 帝國アラッシュ株式會社(下福島二丁目) 下郷製紙所(玉江町二丁目) 西成製紙合資會社(西野田大開町) 大阪朝日新聞社(中之島三丁目) 福島紡績株式會社(下福島一丁目) 日本紡績株式會社(全上) 大阪合同紡績株式會社(天神橋筋東二丁目) 天滿織物株式會社(天滿橋筋西一丁目) 大阪

(三三二)

電燈會社(中之島五丁目) 島田硝子製造所(天滿橋筋東一丁目) 大阪新報社(今橋三丁目)等なり、

### 結 論

著者は大阪の商業に就て、地理につき、歴史につき、貨物につき、内外商業の模様、集散の實況、經濟の現況等を略述せり、しかれどもなほ著者の意見の在る所を盡さんとすれば九牛の一毛にだも及ばざるなり、されど頁數に限ありて一々之を縷述すべからず、特に著者が最も力を盡して述べんとせし、大阪の商業的天候、大阪の商業的人種に就て之を云ふの餘地無きを惜むなり、然れとも讀者諸君、著者はたしかに之を云はんとせし物なりしを記臆せよ、天候と人種とは商業隆替の一大必要物なりしを記臆せよ、大阪の氣候が溫暖にして、しかも風水の警少なく、地震海嘯の虞無きの地なるを記臆せよ、之に聯關して大阪の得意先たる九州、中國、南海、畿内が亦此の如き、天候を有して、土地の豊富なる處なるを記臆せよ、而して大阪の商業的人種が頗る個人的なるに拘らず、しかも必要なる場合に組合的德義を守る者なるを記臆せよ、大阪の商業組合なるものが如何に多數設けられつゝあるかを記臆せよ、博覽會の如き場合には偉大なる社會心、公共心を起し、及ぼして個人の利を得んとしつ

あるかを記臆せよ、この利に敏なる人種は物品の強固なるよりは賣行きの速かなるを企望する爲め、製造品等は頗る粗造に傾くの弊を生ずるを致す者なるを記臆せよ、而して此人種は主として大和人にして、丁稚手代より立身したるもの多きを記臆せよ、夫れ大阪の長所は短所にして、大阪の長所は短所なる他の地方と同じと雖、其短所は寧ろ他の社會に及ぼす短處にして、専ら商業の上より看察すれば寧ろ長所の多くして、短所の少なきを發見するならん、しかも尙ほ短所あらんか、商業教育、商業團結、其他の手段方法を以て之を補ひ、優に文明的商業の天地に突進するを得べし、日本の商業地たる大阪、東洋の商業地たる大阪、漸く進んで世界の商業地たらんとす、嗚呼、大阪は幸福なるかな、

明治三十七年五月十五日印刷  
明治三十七年五月十七日發行

著作權所有

發行所

淺草區馬道町  
八丁目五番地

博

盛

堂

編輯者

白土幸力  
神田區美土代町二丁目一番地

發行者

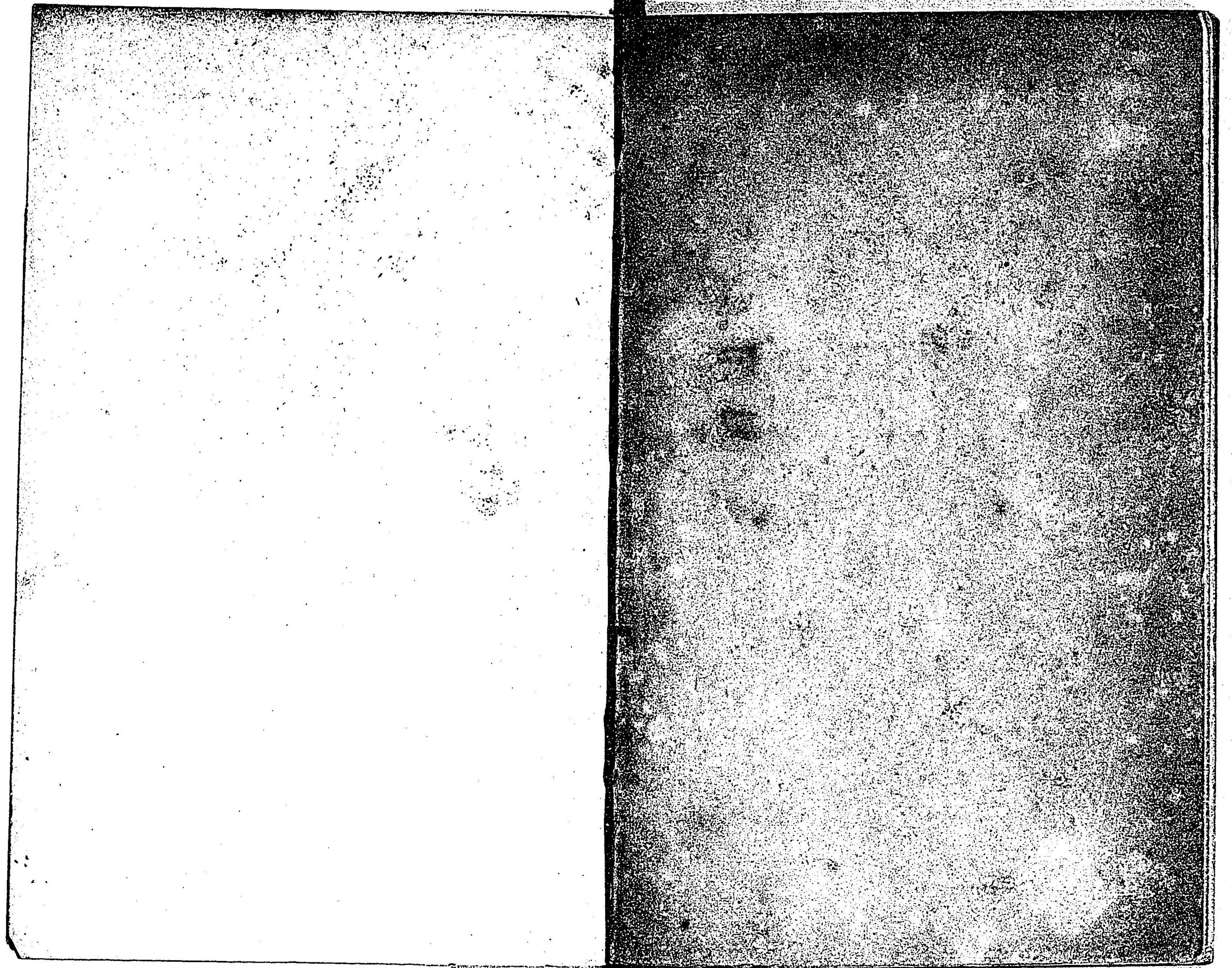
武田乙作  
淺草區馬道町八丁目五番地

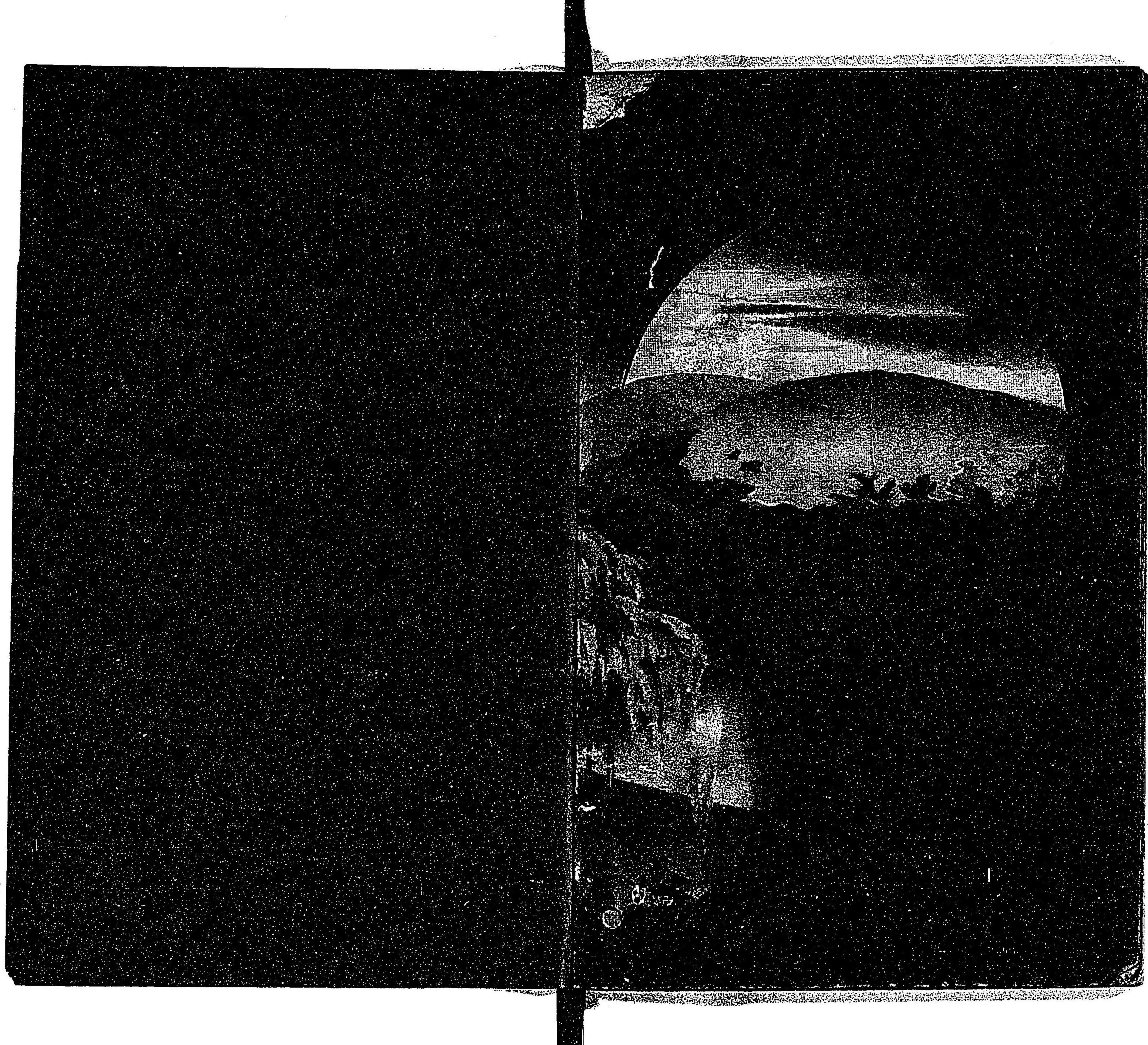
印刷者

佐藤駒治郎  
神田區美土代町二丁目一番地

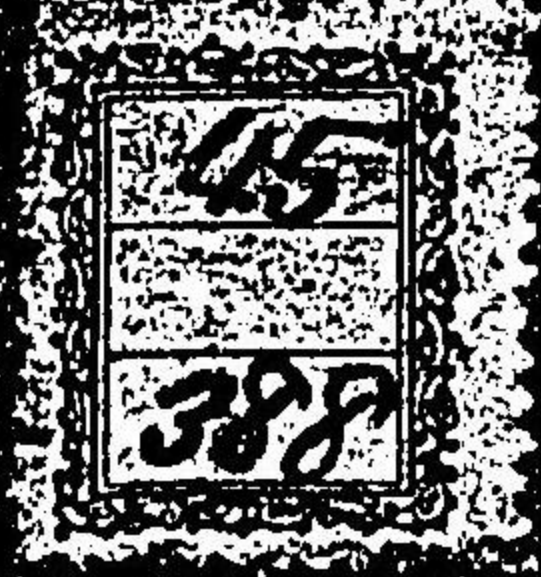
定價金五拾錢

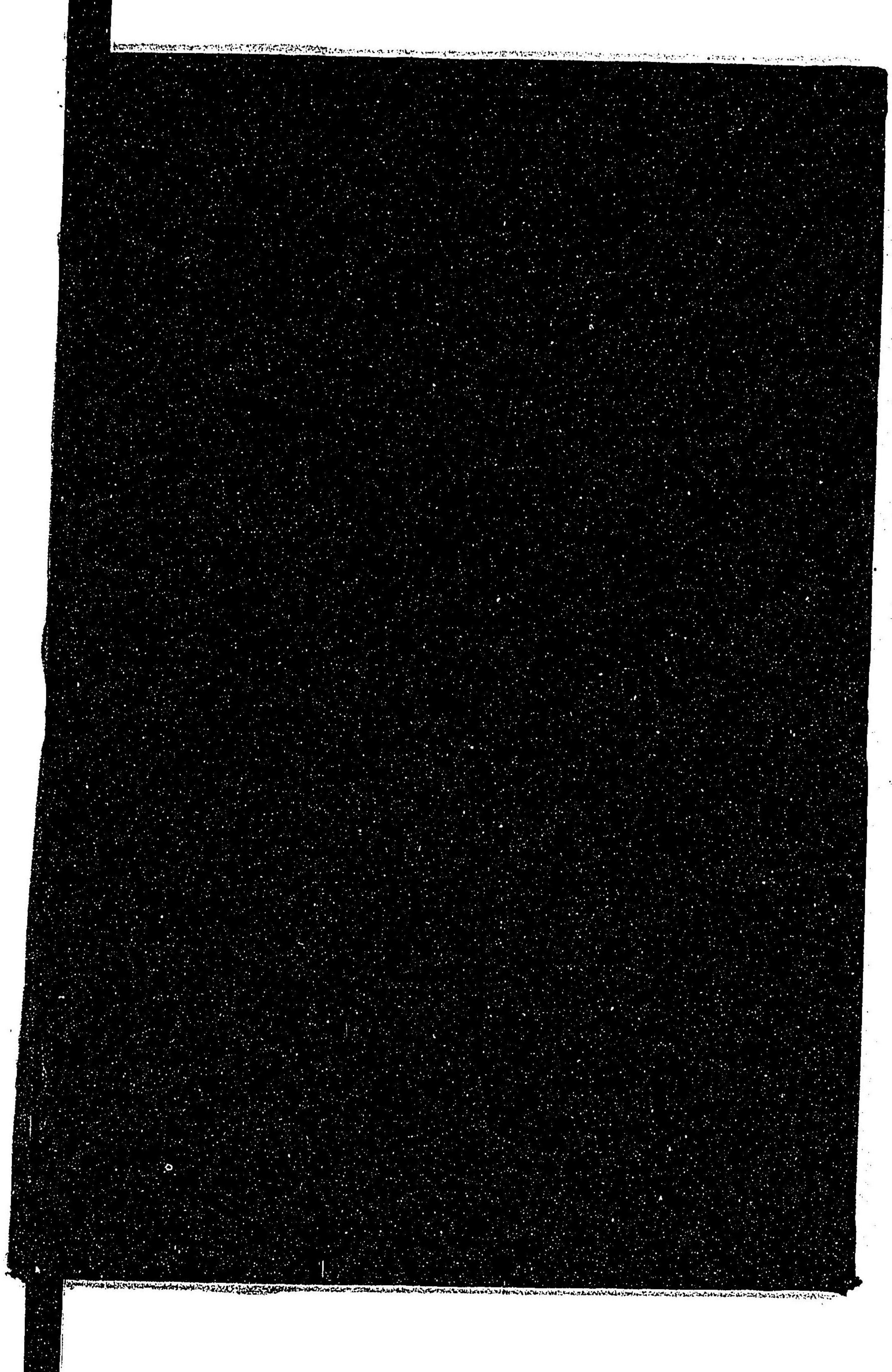














025414-000-7

45-388

京阪名所案内

白土 幸力/編

M37

ADC-2863



